




# International Development Youth Forum 2015

---

国際開発ユースフォーラム2015 報告書

“Hunger × Win-Win”  
2015.3.1.-3.8 @Tokyo



# 目次

## はじめに

代表挨拶	1
顧問推薦文	2

## 第1章 団体概要

団体理念・目標	4
団体の歩み	6

## 第2章 国際開発ユースフォーラム 2015

フォーラムテーマ	7
応募者・参加者内訳	8
フォーラム報告	14

## 第3章 参加者の声

参加者アンケート	49
Memory of IDYF2015	50
OBOG からのメッセージ	55

## 第4章 運営報告

事業スケジュール	59
後援・協賛	59
会計報告	60
運営スタッフ	61

## おわりに

IDYF2015 の成果と課題	62
IDYF2016 に向けて	65

## はじめに

---

### 代表挨拶

国際開発ユースフォーラム（International Development Youth Forum、IDYF）は先進国、途上国問わず世界中のユースが共に開発課題について取り組み、共に未来を創るため 2012 年に設立され、今年度で 3 回目を迎えました。

今年度の IDYF は”Hunger×Win-Win”というテーマを掲げました。従来は開発といえば、先進国から途上国への援助が主流でしたが、途上国の経済発展と先進国の経済の停滞といった状況を背景とし、また援助依存といった課題が指摘される中で、近年注目されているのが持続可能で効率的な”Win-Win”な開発の在り方です。「Win-Win な形で Hunger を解決する方策を、是非世界中のユースとともに生み出したい」その思いを具現化したのが IDYF2015 でした。

IDYF において特徴的なのがその「多様性」です。参加するメンバーは学生だけではなく社会人も多く、また出身国や専門分野も様々です。日本においても女性の社会進出の推進などと相まって「人材の『多様性』の確保」が叫ばれる中で「多様性」の確保は善と認識されているように思います。しかし、IDYF では多様性が大きな壁となることもありました。そもそもどのような社会を実現したいのか、どのような方法でそれを実現したいのか・・・メンバー間で意見は対立し、「グループの中の意見がなかなかまとまらなくて困っている。これは自分たちが異なる国で異なる経験をしてきたからだと思う。」そのようにこぼすメンバーも多くいました。

本報告書ではそのような対立を乗り越え、IDYF メンバーが”Hunger×Win-Win”というテーマに沿って作り上げた解決策やそこに至る経緯が記されています。本報告書は参加者の様子を詳しく紹介し、スタッフの所感も交えて報告することで、報告書をお読みいただく中で実際のフォーラムを追体験できるよう工夫致しました。是非ご一読いただき、IDYF2015 の成果をご覧いただければと思います。



IDYF2015 共同代表

青柳 拓真 渡邊 紗世

## 顧問推薦文

日本の若者が「内向き」になったと言われるようになって久しい。日本国内にも数多くの課題が山積していることを思うと、ある程度は仕方ないことではあるけれども、他方で、世界にはまだ一人一日 100 円未満の所得水準で暮らす絶対貧困人口が約 13 億人（日本の総人口の 10 倍）おり、インドの幼児（5 歳未満）死亡率（6%）は日本のそれ（0.3%）の 20 倍である。IDYF を立ち上げた諸君のように、世界の問題に直接関わりを持つキャリアを目指す若者が、それでも少なからずいることは心強い限りである。

IDYF は今年で 3 年目の比較的若い団体だが、参加者のネットワークは着実に積み上げられているようだ。今年度の企画では、「日本で『国際開発』を議論することの意義」をより深く考察し、その結果を社会的に発信することを目指していると理解している。日本の援助のあるべき姿に関して最近様々な議論がなされている中、今年 IDYF のテーマはタイムリーなものといえよう。

この文章を目にしている皆さんは、国際開発に多少なりとも関心を持っている人かもしれない。国際開発に関わるキャリアは途轍もなくやり甲斐があるものだ。好きで選んだ仕事は何十年やっても全く飽きないし、辛い時でもいくらでも頑張れる。しかし同時に、様々なしがらみもできてくる。途上国の様々な立場の人々（政策担当者、研究者、田舎のお百姓さんや日雇い農業労働者まで）と会話をする機会が頻繁にあるが、一度プロになると、そこでの人付き合いは特定の社会的文脈（援助や政策助言を「与える側」、研究成果を競うライバル、研究に必要なデータを収集する側、等）に縛られ、相手からもそういう目で見られがちになる。そのような自分の立場を離れて自由に交流をすることは、必ずしも容易ではない。

しかしながら、国内外を問わず、学生の時からの付き合いの友人は別だ。初めて出会った時のように、社会的立場のしがらみから自由に付き合える。この文章を目にしている人の中には、大学生も少なくないかもしれない。学問の世界は日進月歩である。例えば、開発経済学における過去 10 年程の間の分析手法の変化や実証的発見の蓄積の速さには目を見張るものがある。ということは、大学で最新の学問知識を身につけたとしても、卒業して 10 年も経つとその知識自体は時代遅れになってしまう可能性も十分ある。他方、大学時代に築いた人脈は、一生の財産として、その価値は増えることこそあれ減ることは決してない。

今から約 30 年前になるが、私自身も大学生の時にゼミ合宿で夜通し議論をしたり、社会や社会との関わり方について昼間から酒を飲みながら語り合う友人たちと出会っ

たりすることができた。そこでの議論には、今思い出すと赤面するような、現実離れした「青臭い」ものも多々あったが、しかし、そのような青臭い時間を彼らと共有したことが、その後社会に出て様々な「現実」に直面した際にも一定の理想を追うことを諦めない、という姿勢を育んでくれたのではないか、と思っている。その友人たちは大学卒業後、民間企業、ジャーナリズム、役所、主婦、政治家、NGO、研究者など様々な方向に進んでいるが、30年経った今でも、昔ながらの社会的な柵のない付き合いが続く。そしてそのような交流は、自分の仕事にも、新鮮な刺激や反省の材料を与えてくれる。

そのような友人達が世界中の各地に散らばっているとすると、こんな魅力的なことはない。もし30年前に IDYF があれば、私も真っ先に参加をしたことであろう。



早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授  
不破信彦

## 第1章 団体概要

---

### 団体理念・目標

世界の人口は70億人を超え、BRICsを中心に多くの国が貧困から脱却し、発展を謳歌しています。しかし、実際には一部の層に富が蓄積される傾向が継続し、貧困の罠から脱却できずにいる最貧層は依然存在しています。格差は縮まるどころか拡大しており、2015年が期限とされたミレニアム開発目標の達成も困難な状況です。

そのような状況下で、日本に限らず世界中の多くの若者が国際開発という分野に興味を持ち、将来のキャリアとして検討しています。途上国、先進国それぞれの国で、自らの国や世界の開発課題に共通の関心を持ち、国際開発という道を選ぼうとしています。

しかし、国際開発を志すユースの交流の機会は限られています。国際開発に関心のある学生が結びつき、各国の状況を踏まえて互いの価値観を知り、意見をぶつけ合い、よりよい社会を目指して1つの成果を創り上げる。そうした経験を通じ、将来も続く関係を構築できる場として、国際開発ユースフォーラムを設立しました。2015年3月の開催にて3年目となります。

#### ●団体理念

## Design Our Future

この理念には、よりよい未来を先進国・途上国の人が一緒に作り上げるという思いが込められています。国際開発に関する意見や見方は、先進国・途上国という生まれた環境や育った環境によって異なりますが、そのような多様性を、議論を通じて互いに理解し合い、世界の課題を共通の課題として認識し、よりよい未来を創るための国際開発を共に模索します。

●目標

**目標 1「国際開発に関心があるユースの継続的なネットワーク構築」**

- ・世界中から国際開発に関心を有するユースを集め、将来にわたって活用できるネットワークを構築します。
- ・フォーラムの規模を拡大し、参加者同士の横のつながりをより広くします。
- ・OBOG 会の維持・発展等により、参加者同士の年度を越えた、縦のつながりを強化します。

**目標 2「自らの価値観、知識、考え方の幅を広げる機会の提供」**

- ・テーマに沿ったインプットを行い、参加者が知識や考えを広げる機会を提供します。
- ・異なるバックグラウンドをもつ参加者が一堂に会し議論することで異なる考え方を知り、自らの価値観を深める機会を作ります。

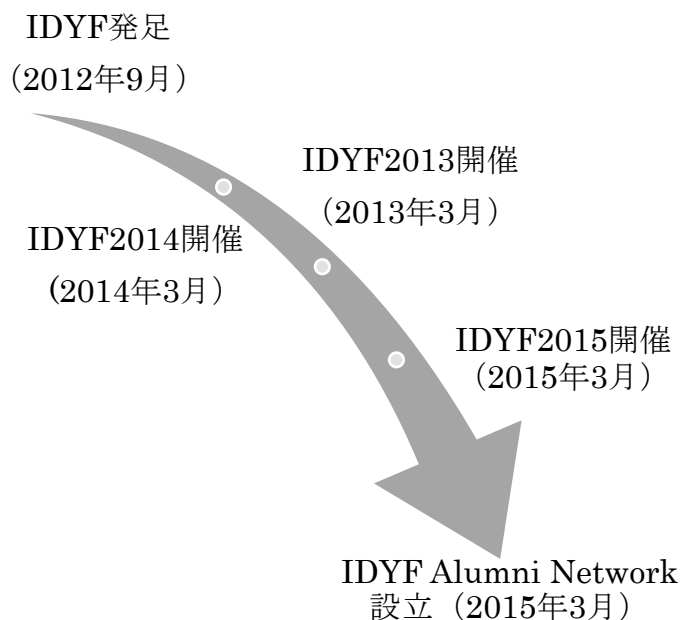
**目標 3「社会に新たな変化をもたらす成果の創出」**

- ・単に集まり議論するだけではなく、議論の成果が社会にとって価値あるものとなるよう努めます。
- ・国際開発に関心のある人々にとって、自らが生み出した成果が社会に変化を与える経験の第一歩となるよう、その機会を提供します。

## IDYF の歩み

	開催地	規模	応募総数	テーマ
IDYF2013	日本	14 か国 36 名 (内日本人 14 名)	472 名	ミレニアム開発目標
IDYF2014	日本	20 か国 38 名 (内日本人 12 名)	827 名	デザイン思考
IDYF2015	日本	34 か国 44 名 (内日本人 8 名)	4672 名	Hunger×Win-Win

IDYF は開催ごとにその規模を拡大し、また多様性の確保に取り組んできました。また 3 年目を迎えた IDYF2015 には IDYF Alumni Network を組織し、年度を越えたつながりの強化を実現しています。





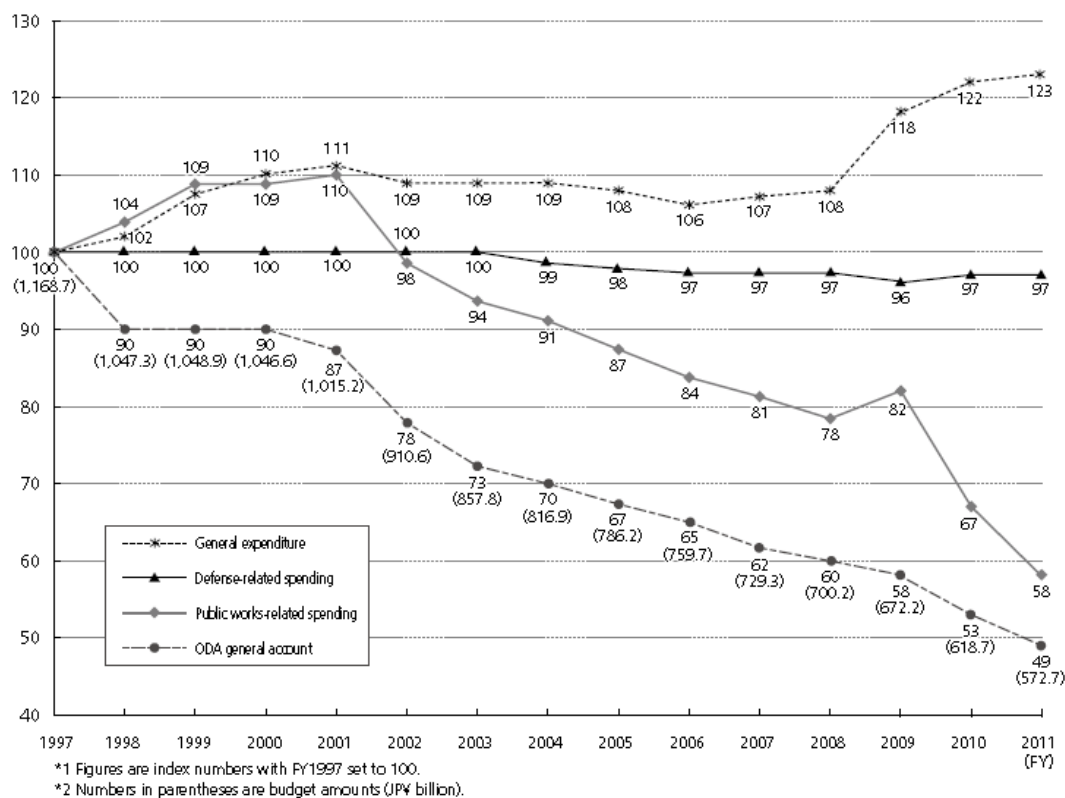
## 第2章 国際開発ユースフォーラム 2015

### フォーラムテーマ

IDYF2015 のテーマは Hunger×Win-Win です。

国連の報告によると、2014年現在、世界の9人に1人が慢性的な栄養不足に悩まされています。飢餓は人命を脅かし、誰もが早期の解決を望む課題です。飢餓撲滅においてはいわゆる先進国からの援助が大きな役割を果たしてきました。しかし、それらの国々も人口減少や過度な開発による環境問題、社会保障問題、エネルギー問題といった様々な課題を抱えており、他国の飢餓を削減するための援助に今後も力を割くことが出来るとは限りません。例えば、IDYF2015開催国である日本のODA予算は、減少の一途をたどっています。(図)これは、社会保障費など他の項目の支出が増大していることなどが背景にあります。このような現状を踏まえて、私達は先進国から途上国への援助による一方向的な解決策を模索するのではなく、Win-Winな関係を築くことこそが持続的に課題を解決する鍵ではないかと考えるに至りました。これが、IDYF 2015においてHunger×Win-Winというテーマが掲げられた背景です。

Trends in Japan's ODA Budget and Other Major Expenditures



(出典：2011年 ODA 白書

[http://www.mofa.go.jp/policy/oda/white/2011/pdfs/29\\_oda\\_wp\\_2011.pdf](http://www.mofa.go.jp/policy/oda/white/2011/pdfs/29_oda_wp_2011.pdf))

## 応募者・参加者内訳

### ● 応募者内訳

IDYF2015 には、162 の国と地域から、4672 の応募があった。内、412 人が「スカラシップがなくても参加する」と回答しており、応募者数の 9%にあたる。

地域別に見ると（表 1）、東南アジアの応募者が 1185 人と応募者全体の 25%を占めて一番多く、その後アフリカ(980 人、20%)、ヨーロッパ(841 人、18%)と続く。

表 1 地域別 応募者内訳

地域		応募者数	内、スカラ	内、スカラ	スカラシッ プがなくて も参加する と答えた 応募者の 割合
			シップがな くても参加 すると答え た人	シップがな いと参加し ないと答え た人	
Africa		1098	90	1008	8%
Asia	Central Asia	299	18	281	6%
	East Asia	97	48	49	49%
	South Asia	403	19	384	5%
	South East Asia	1185	111	1074	9%
	West Asia	505	35	470	7%
America	North America	45	3	42	7%
	South and Central America	166	17	149	10%
Europe		841	62	779	7%
Oceania		33	9	24	27%
Total		4672	412	4260	9%

国別に見ると（表 2-1・表 2-2）、インドネシアの応募者が 519 人と一番多く、その後フィリピン（256 人）、パキスタン（224 人）、ベトナム（211 人）、インド（132 人）とアジアの国々が続く。アジア以外の国で一番多かった国はナイジェリア（123 人）である。

表 2-1 国別応募者数(Afghanistan-Liberia)

国名	応募者数	内、スカ	内、スカ
		ラシップ がなくて も参加す ると答え た人	ラシップ がないと 参加しな いと答え た人
Afghanistan	49	4	45
Albania	19	0	19
Algeria	51	8	43
Argentina	21	1	20
Armenia	66	2	64
Australia	20	8	12
Austria	2	0	2
Azerbaijan	29	3	26
Bahamas	1	0	1
Bangladesh	111	10	101
Barbados	1	0	1
Belarus	33	1	32
Belgium	7	1	6
Belize	1	0	1
Benin	12	1	11
Bhutan	6	0	6
Bolivia (Plurinational State of)	6	0	6
Bosnia and Herzegovina	29	2	27
Botswana	9	1	8
Brazil	17	1	16
Brunei Darussalam	3	1	2
Bulgaria	25	2	23
Burkina Faso	8	1	7
Burundi	14	2	12
Cabo Verde	2	0	2
Cambodia	58	12	46
Cameroon	47	6	41
Canada	22	1	21
Central African Republic	3	0	3
China	30	7	23
Colombia	16	2	14
Congo	1	0	1
Costa Rica	5	2	3
Côte d'Ivoire	1	0	1
Croatia	17	2	15
Cyprus	1	0	1
Czech Republic	17	0	17
Democratic Republic of the Congo	15	0	15
Denmark	6	0	6
Djibouti	1	0	1
Dominica	2	0	2
Dominican Republic	4	0	4
Ecuador	7	0	7
Egypt	122	17	105
El Salvador	3	1	2
Eritrea	1	0	1
Estonia	4	0	4
Ethiopia	29	2	27
Fiji	4	1	3
Finland	1	0	1
France	12	1	11
Gambia	27	3	24
Georgia	39	2	37
Germany	19	3	16
Ghana	86	11	75
Greece	15	3	12
Guatemala	7	0	7
Guinea	2	0	2
Guinea-Bissau	1	0	1
Guyana	9	2	7
Haiti	17	4	13
Honduras	3	0	3
Hungary	11	0	11
India	132	5	127
Indonesia	519	56	463
Iran (Islamic Republic of)	6	0	6
Iraq	21	5	16
Ireland	3	0	3
Israel	6	2	4
Italy	21	5	16
Jamaica	8	0	8
Japan	45	38	7
Jordan	21	1	20
Kazakhstan	60	7	53
Kenya	97	2	95
Kosovo	36	4	32
Kuwait	3	3	0
Kyrgyzstan	83	6	77
Lao People's Democratic Republic	13	0	13
Latvia	10	0	10
Lebanon	12	1	11
Liberia	15	1	14

表 2-2 国別応募者数(Libya-Zimbabwe)

国名	応募者数	内、スカ	内、スカ	国名	応募者数	内、スカ	内、スカ
		ラシップ がなくて も参加す ると答え た人	ラシップ がないと 参加しな いと答え た人			ラシップ がなくて も参加す ると答え た人	ラシップ がないと 参加しな いと答え た人
Libya	2	0	2	Saint Kitts and Nevis	1	0	1
Lithuania	23	3	20	Samoa	1	0	1
Madagascar	3	0	3	Saudi Arabia	1	0	1
Macedonia	32	0	32	Senegal	1	0	1
Malawi	35	3	32	Serbia	33	1	32
Malaysia	56	5	51	Seychelles	1	0	1
Maldives	1	0	1	Sierra Leone	7	1	6
Mali	2	0	2	Singapore	9	0	9
Malta	1	1	0	Slovakia	11	1	10
Marshall Islands	1	0	1	Slovenia	17	0	17
Mauritania	3	0	3	Solomon Islands	1	0	1
Mauritius	5	0	5	Somalia	9	3	6
Mexico	20	3	17	South Africa	29	1	28
Mongolia	15	2	13	South Sudan	4	0	4
Montenegro	14	0	14	Spain	16	4	12
Morocco	53	3	50	Sri Lanka	16	1	15
Mozambique	4	0	4	Sudan	11	0	11
Myanmar	35	1	34	Swaziland	4	0	4
Namibia	5	1	4	Sweden	5	1	4
Nepal	131	3	128	Switzerland	3	2	1
Netherlands	8	2	6	Syrian Arab Republic	15	1	14
New Zealand	6	0	6	Tajikistan	46	0	46
Nicaragua	3	0	3	Thailand	24	6	18
Niger	1	0	1	Timor-Leste	2	1	1
Nigeria	123	8	115	Togo	6	1	5
Pakistan	224	9	215	Trinidad and Tobago	2	0	2
Palestine	13	1	12	Tunisia	50	7	43
Panama	2	0	2	Turkey	100	4	96
Papua New Guinea	1	0	1	Turkmenistan	3	0	3
Paraguay	2	0	2	Uganda	79	1	78
Peru	8	1	7	Ukraine	87	2	85
Philippines	256	16	240	United Kingdom	24	3	21
Poland	49	4	45	United Republic of Tanzania	46	3	43
Portugal	6	0	6	United States of America	23	2	21
Qatar	1	0	1	Uzbekistan	39	0	39
Republic of Korea	5	1	4	Venezuela (Bolivarian Republic of)	6	0	6
Republic of Moldova	52	4	48	Viet Nam	211	13	198
Romania	54	3	51	Yemen	39	4	35
Russian Federation	53	5	48	Zambia	19	1	18
Rwanda	14	1	13	Zimbabwe	31	1	30

●参加者内訳

IDYF2015には、34の国と地域から44名のユースが参加した。地域別・国別の参加状況は図1・表3にまとめた。出身国・地域以外の属性の内訳は、表4にまとめた。

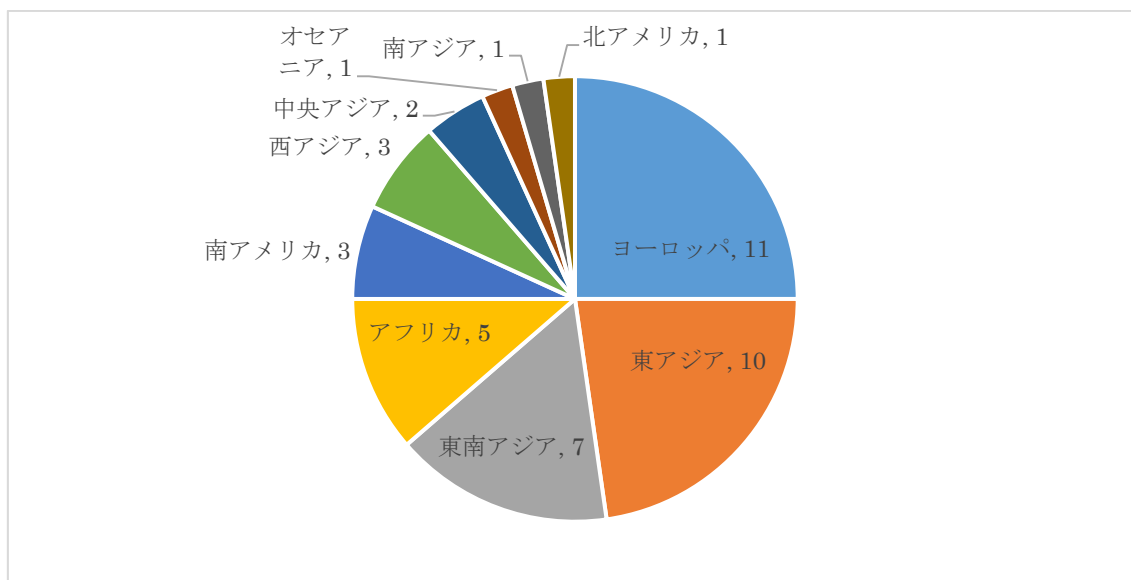


図1・参加者の出身地域内訳

表3・参加者の出身地域・国内訳

地域	国・地域 (参加者数が1名の国・地域は参加者数を省略した)
ヨーロッパ(11名)	イタリア(2名)、ウクライナ、ギリシャ、スイス、スウェーデン、スペイン、スロバキア、ドイツ、ベラルーシ、ベルギー
東アジア(10名)	韓国、中国、日本(8名)
東南アジア(7名)	インドネシア、フィリピン、ベトナム(3名)、マレーシア、ミャンマー
アフリカ(5名)	アルジェリア、ウガンダ、ザンビア、ブルキナファソ、マダガスカル
南アメリカ(3名)	コスタリカ、コロンビア、ペルー
西アジア(3名)	シリア、トルコ、パレスチナ
中央アジア(2名)	アゼルバイジャン、キルギス
オセアニア(1名)	フィジー
南アジア(1名)	インド
北アメリカ(1名)	アメリカ

表 4・参加者の属性の内訳

項目	内訳
先進国・途上国出身者比	OECD 加盟国出身者 20 名、OECD 未加盟国出身者 24 名
男女比	男性 17 名、女性 27 名
年齢構成（応募時）	18 歳：4 名、19 歳：6 名、20 歳：7 名、21 歳：6 名、 22 歳：5 名、23 歳：4 名、24 歳：2 名、25 歳：4 名 26 歳：2 名、27 歳：2 名、28 歳：2 名（平均 21.9 歳）
職業（応募時）	高校生 2 名、大学生 25 名、大学院生 7 名、社会人 9 名

募集の際には、「Plan in the future」という項目を設け、複数回答形式で将来の予定・夢を調査した。結果は図 2 に示した。「国際機関」と回答した参加者が最も多く（26 名、59%）、その後「NGO/NPO」が続いている（18 名、40%）。

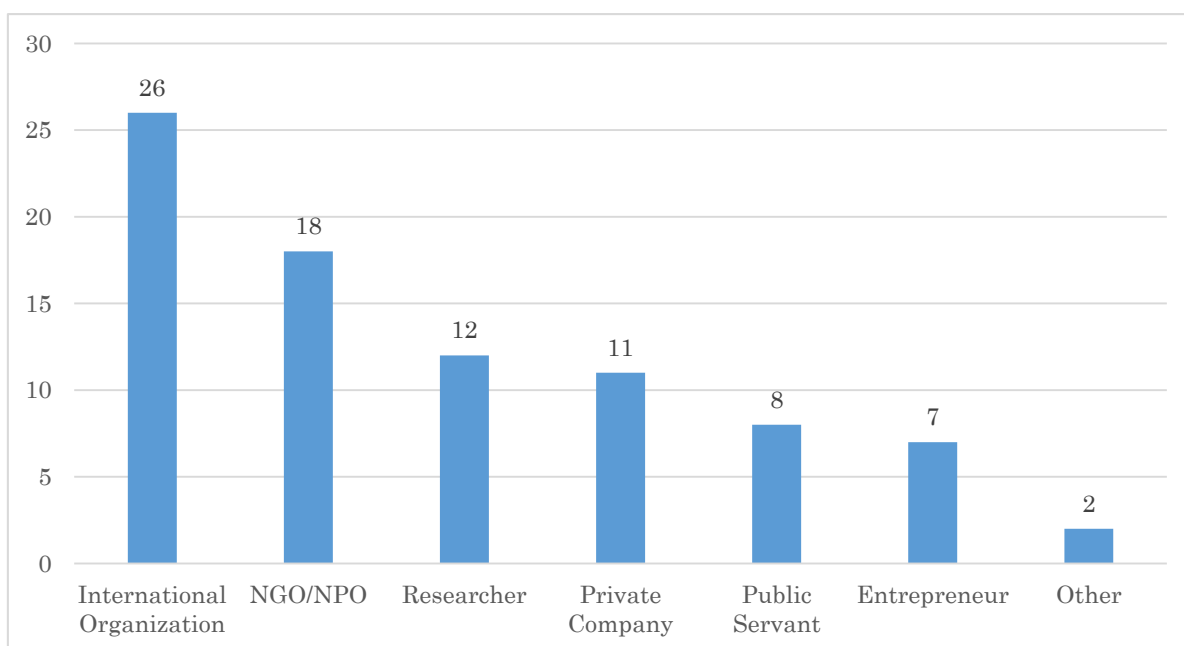


図 2・参加者の「Plan in the future」

## ●チーム分け

チームによって出身国・性別・年齢・職業の偏りがなるべく出ないようにチーム分けを行った。チームごとの属性の内訳は表 5-1・表 5-2 に示した。

表 5-1 チーム別の属性内訳（出身国の属性・性別・職業・年齢）

Team	出身国の属性			性別		職業				平均年齢 (応募時)
	日本	OECD 加盟国 (日本を 除く)	OECD 未加盟 国	男性	女性	高校 生	大学 生	大学 院生	社会 人	
Team1	1	2	2	2	3	0	4	0	1	22.0
Team2	1	1	4	2	4	0	3	2	1	21.8
Team3	1	2	3	2	4	0	4	0	2	22.3
Team4	1	1	3	2	3	1	2	1	0	21.2
Team5	1	1	3	2	3	0	4	0	1	22.4
Team6	1	2	3	2	4	0	4	1	1	21.8
Team7	1	1	4	3	3	1	2	2	1	21.7
Team8	1	2	2	2	3	0	2	1	2	22.0

表 5-2 チーム別の属性内訳（出身地域）

Team	東ア ジア	ヨーロ ッパ	アフリ カ	東南 アジア	南アメ リカ	西ア ジア	中央 アジア	オセア ニア	南ア ジア	北アメ リカ
Team1	1	1	0	0	1	1	0	1	0	0
Team2	2	1	1	1	0	0	1	0	0	0
Team3	2	1	1	1	0	1	0	0	0	0
Team4	1	1	0	1	0	0	1	0	1	0
Team5	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0
Team6	1	2	0	1	0	1	0	0	0	1
Team7	1	2	1	1	1	0	0	0	0	0
Team8	1	2	1	1	0	0	0	0	0	0

## フォーラム報告

IDYF2015 は、2015 年 3 月 1 日～7 日にかけて東京で開催されました。以下が大まかなスケジュールです。

	午前セッション (09:00-12:00)	午後セッション (13:00-17:00)	夜セッション (18:00-20:00)
Day1		受付	開会式、Welcome Party
Day2	アイスブレイク	基調講演、 因果分析ワーク	グループワーク
Day3	Fieldwork	Fieldwork	グループワーク
Day4	グループワーク	グループワーク	Feedback
Day5	グループワーク	グループワーク	Social Event
Day6	グループワーク	リハーサル	グループワーク
Day7	最終報告会準備	最終報告会	Farewell Party
Day8	観光 (オプション)	観光 (オプション)	観光 (オプション)

## Day1 (3月1日)

### スケジュール

18:00~20:00 開会式

20:00~22:00 Welcome Party

### □開会式

18:20~ 代表挨拶

18:25~19:25 田瀬和夫様による基調講演

19:25~19:45 フォーラムテーマ・課題発表

19:45~20:00 フォーラム中のロジスティックス確認



現在デロイトトーマツコンサルティング  
合同会社執行役員で以前は国際連合の人間  
の安全保障ユニット課長を務められました、  
田瀬和夫様による基調講演では、“What is  
Happiness?”という問いが参加者になげかけ  
られ、「開発とは何か」を参加者が考える重要  
な契機となりました。参加者からは



Achieving Goals, Self-satisfaction, Good  
Health, Freedom from Fear, Connection with Others, Peace, Love, Equality...と多様  
な答えが積極的に出され、各々が理想とする社会が言葉となって表現されました。フォー  
ラム中も自分たちのプランを通して実現したい社会を意識して課題に取り組むチー  
ムが多く見られ、1時間という限られた時間での講演となりましたが、フォーラム全体  
の基礎となる知見を得ることが出来、大変有意義なものとなりました。

開会式では“Propose a solution to hunger, which creates win-win situation”という  
課題も発表されました。参加者同士初対面の場ではありましたが、既に一体感も生まれ、  
これから始まるフォーラムに全員が期待を膨らませている姿が印象的でした。



## □Welcome Party

開会式が終わった後には、オリンピックセンター宿泊 D 棟 9 階のレストランさくら  
にてウェルカムパーティーを行いました。

参加者は机の上にはずらっと並んだおいしそうな食事、特に海外とは少し違った日本風  
の唐揚げやカレー、おからの揚げ物に興味津々の様子で、2人の共同代表による乾杯を  
待ちきれず先にこっそり手を出している参加者がちらほら見受けられました。やはり人  
間空腹には耐えられないようです。

多くの参加者が日本に到着したこの日は生憎の雨空。雨の中の移動を経て最初は緊張や疲れが見えた参加者ですが、暖かい食事でお腹が満たされたのか、次第に笑顔がほころび始め、また自然と参加者間での会話が弾みはじめました。立食であったにも関わらず、ほとんどの参加者が最後までその場に就いて話し続けており、皆楽しんでいただけたのではないかと思います。



パーティーが一段落した頃にはフォトコンテストの優秀者の表彰を行いました。フォトコンテストは、大会前に IDYF の Facebook ページ上で開催された企画で、参加者が IDYF のロゴを載せた自分の写真を投稿し最も写真に投票(like)を獲得した参加者に景品を贈るといったものです。自分の国の有名なスポットで撮った写真や、自分の好きな場所を紹介する写真など、それぞれ様々な趣向を凝らしていました。全部で3回行われ、第1回目はインドからの参加者、第2回目はヨルダンからの参加者、第3回目がギリシャからの参加者が賞を獲得しました。景品は手作りの升で、側面にはその写真と IDYF のロゴが張り付けられています。参加者は大喜びの様子で、早速升を使いたがっている様子でした。賞を得られなかった参加者も、このフォトコンテストを通じてお互いのことをよく知れた様子でした。

参加者が打ち解け、食事後一緒に外に繰り出す程仲良くなったという点では大成功だったパーティーですが、一方で初日から厳しい現実を見せつけられた会でもありました。それは、パーティー終了後会場には大量の食事が残されていたという点です。飢餓問題に関して議論をするためにフォーラムに応募し、かつ食料廃棄にも問題意識を抱えている参加者が集まる会でさえも、大量の食料廃棄が生じてしまいました。もちろん、残さず食べれば飢餓問題が解決するというものではありませんが、それでも私たちの日常の行動について深く考えさせられる光景でした。

## Day2 (3月2日)

### スケジュール

09:00~12:00 Ice Break

13:00~14:30 Hunger Free World 基調講演

14:30~17:00 因果分析ワーク

18:00~20:00 グループワーク

## □Ice Break

3月2日は、前日の雨とは打って変わって日本晴れ。空気は透き通り、オリンピックセンターの窓からはきれいな富士山が見えました。

この日の午前中はアイスブレイクを行いました。世界中のユースが一堂に会するIDYFでは、初対面であることに加え、お互いの文化や価値観が異なるという状況下でそのまま議論を始めることは困難です。そのため、参加者同士がまずお互いのことを知り、絆を深めてもらうことで議論を円滑かつ効率的に行う下準備をすることがアイスブレイクの狙いです。

### ○アイスブレイクの流れ

アイスブレイクは以下の順序で行いました。

- 1.シンデレラは誰だ？ゲーム
- 2.チーム発表
- 3.嘘つきは誰だ？ゲーム
- 4.チーム名決め

### ○各種概要

#### 1.シンデレラは誰だ？ゲーム

まず行なったのは「シンデレラは誰だ？」ゲームです。

参加者に自分を表す絵を1枚描いてもらい、それをスタッフが回収して他の参加者に1枚ずつランダムに振り分けます。その後、各参加者は自分が持っている絵を描いた参加者を探し当て、名前や国、絵のエピソードなどに関して尋ねます。全員相手を見つけたら、今度は自分が持っている絵を描いた人のことを他の全員の前で紹介する、というゲームです。自分が描いた絵をシンデレラのガラスの靴に例えて、このようなタイトルが付けられています。

自分の趣味や好きなものなどを描いた人や理想の世界を描く人までテーマも多様で、かつ絵のタッチにも様々な個性が表れていました。参加者は歩き回って相手を探す時から大盛り上がりで、楽しく自己紹介が出来たようです。



## 2. チーム発表

シンデレラゲームで全員一通り自己紹介を終えた後、5~6人1組のグループワークのチーム発表を行いました。この班は、参加者のバックグラウンドに多様性が生まれるように運営メンバーが振り分けたもので、チームごとに分けられると皆すぐに打ち解けていました。



## 3. 嘘つきは誰だ？

チーム対抗で行われたのは、「嘘つきは誰だ？」ゲームです。これは、あるチームが全員の前に立ち、チームの内1人が嘘の自慢を話し、残りのメンバーが本当の自慢を話します。他のチームは誰が嘘をついているか当てる、というゲームです。他のチームの嘘を当てた場合に加点になる他、他の班を上手く欺いても加点になるため、巧妙な嘘がたくさんつかれ、会場が騒然としながら盛り上がっていました。全世界4500人以上の応募者の中から選抜された参加者は並外れた経験をした人や興味深い経歴を有した人ばかりであり、互いに共有しあって刺激し合って欲しいとの思いから、普段人には話づらい自慢話をテーマにしました。

#### 4. チーム名決め

アイスブレイクの最後にはチーム名を決定しました。これまでのアイスブレイクを通じて参加者間での共通点や雰囲気がつかめたところで、その班を代表するチーム名をつけてもらうことで、チームとしての一体感、帰属意識を生み出すことが狙いです。

チーム名は、

1班. SERFA 2班 .Red Function 3班 Yallah 4班 GIMAJI  
5班 Fabulous Five 6班. Canpai 7班. Roots 8班.∞(Infinity)

となり、出身国の言葉を利用したものや、メンバーの出身国の頭文字を繋げたものなど、班ごとの個性があふれるチーム名が出揃いました。参加者はチーム及びチーム名が気に入った様子で、その後模造紙にチーム名をデコレーションするなどチームでずっと行動していました。

お互いのことをよく知ることができるよう工夫されたコンテンツを盛り込んだアイスブレイクでしたが、参加者からも良かったとの声を頂けて一安心しました。アンケートには、他にも面白いアイスブレイクを知っているとの声もあり、世界中でされている様々なアイスブレイクを取り込んだり、そのアイデアをストックしたりするのも面白いと感じました。この日は春を感じる温かさで、参加者の緊張も溶かしてしまうアイスブレイクに最適の日でした。

## □Hunger Free World 基調講演

アイスブレイクを終え、いよいよフォーラムは具体的な議論へと入っていきました。まずは特定非営利活動法人ハンガーフリーワールドより西岡はるな様にお越しいただき、飢餓についての講演をしていただきました。具体的には、飢餓とは何か、そして飢餓の原因という根本的、かつ解決策を考える上では欠かせないトピックについてお話いただきました。

### ○飢餓とは何か

飢餓には突発的飢餓と慢性的飢餓の2種類があります。突発的飢餓とは自然災害や紛争などの突発的な要因による食糧不足から起こる飢餓で、緊急食糧支援が必要となります。一方で、慢性的飢餓は継続的な食糧不足が原因であり、栄養不足の状態が続くことを言います。突発的飢餓はニュースや新聞でも



取り上げられやすく、注目が集まりやすいのですが、慢性的飢餓は直接の死因にならないことや緊急性がないことから見過ごされがちです。この解決には知識や技術をつけさせるなどの自立支援が必要となります。

そして都市における飢餓という新たなタイプの飢餓も登場しています。経済的に貧しい等の理由からファストフードやスナックのみしか手に入れられないような場合、カロリーの取りすぎにより栄養バランスが崩壊し、それに伴って病気にかかる危険性が高まります。

#### ○飢餓の原因

飢餓の原因について、西岡さんはグローバルな原因とローカルな原因の二つに分けて話してくださいました。

初めにグローバルな原因についてです。世界の穀物生産量は増えており、実は世界中の人が食べるのに十分な量が生産されています。しかし、生産された穀物は食用以外にも、34%が家畜などの肥料として、20%はその他バイオ燃料などとして使われています。更には食用に生産された穀物のうち3分の1は結果的に無駄になったり捨てられたりしていて、その量はサハラ以南アフリカで生産される穀物とほぼ同じ量にもなりません。また、先進国による買い占めや投機による穀物の価格上昇、貿易による他国の生産物の流入、気候変動による不作は特に貧しい開発途上国に大きな影響を与え、そこに住む人々が食糧を手に入れられなくなっています。

次にローカルな原因について、バングラデシュ、ブルキナファソ、ウガンダ、ベナンの4国を例に紹介していただきました。一例としてバングラデシュをあげると、独立戦争とそれによる経済やインフラの崩壊、洪水にあいやすい土地、多すぎる人口を支えるのには足りない農地や、農薬の過剰使用などがローカルな要因としてあげられる、というお話でした。

#### ○持続的な活動のために必要なもの

最後に西岡さんからハンガー・フリーな世界をどのように持続的に実現することができるかというお話をしていただきました。1つ目は地域の文化や社会にあった活動を行うこと、2つめは国、地方の政府を巻き込むこと、3つ目は自立を支援すること、そして4つ目が不平等をなくすことです。

講義の内容はこれから飢餓の解決策を探っていくうえで非常に重要なポイントとなるもので、参加者も真剣に聞き入っていました。講演後は20分間の質問時間が設けられていましたが、若者の農業離れにはどう対応するか、テクノロジーの導入で農業での雇用が減ることはないのか、途上国・先進国はどのように自由貿易で折り合いをつけているかなど、面白い質問が多く飛び交い、時間いっぱいまで質疑応答が行われました。

フォーラムの初めに「飢餓」を捉え直す機会を持てたのは非常に有意義であったと思います。この講演を受け、都市での栄養不良の問題をテーマに選んだチームがいたり、食糧廃棄の解決を先進国の Win として取り上げたチームがいたり、各チームの議論や成果にも大きな影響がありました。



## □因果関係分析ワーク

### ○目的

今年度は「2つの Win が存在する状況を作り出す形で飢餓解決の方策を考えること」が課題となっており、「一方の Win を、飢餓問題の解決とすること」とすることが条件となっていました。しかし飢餓の解決という言葉はとても広く、飢餓のどの部分に着目するかを具体的に示す必要性がありました。そこで、このワークでは飢餓の構造を分析し、どのような事柄が関連し、どのように飢餓が起こっているのかを皆で考えました。これを通じて飢餓について深く考えること、またアプローチしたい飢餓の原因について言及できるようになることを目的としました。



### ○全体の流れ

1. 個人で飢餓の原因をブレインストーム
2. ブレインストームで出した案をチームで課題ごとにグループ化
3. フォーラム全体で決めた 5 つの課題群にチームを再編成する
4. それぞれの課題群について因果関係図を描く

## ○結果

ブレインストームでは時間をいっぱい  
に使い、それぞれが真剣にブレインス  
トームを行っていました。原因のグルー  
プ化の段階では、非常にスムーズに進むチ  
ームもあれば既に議論が紛糾し、もめて  
いるチームもありました。各チーム様々  
なグループが出てきた中で、特に多く見  
受けられた **Education, Poverty, Politics,**



**Environment, Infrastructure** の 5 つの課題群を運営メンバーで選定し、5 つのグルー  
プに分かれて因果関係図を描き始めました。チームによって方法はかなり異なり、更に  
細分化してグループ分けを行い、最後に矢印を付け足すチームもあれば、最初から矢印  
を描き演繹的に図を描いていったチームもありました。結局、当初の予定であった 20  
分間では時間が足らず、結果的に 30 分程度を使い因果関係図が完成しました。

因果分析のためにチームを再編成する際、チームの中で誰がどの課題群を分析するか  
はメンバーに自由に決めてもらいましたが、そこに個々人の嗜好が表れていたのが印象  
的でした。例えば、独立に強い誇りを持つシリアの参加者は **Politics** のチームにおり、  
環境に強い関心があると話していたウガンダの参加者は **Environment** のチームを選ん  
でいました。また、**Infrastructure** には日本人がとても多く見受けられました。

## Day 3 (3月3日)

### スケジュール

09:00~18:00 Field Work

19:00~21:00 グループワーク

### □ Field Work

10:30~11:30 Table For Two 講義

11:50~13:20 グループ別 Mini-Work

14:30~17:00 JICA、Oxfam、Second Harvest 訪問



## ○Table For Two 講義

### ◇講師

Table For Two International (TFT) 笹本愛子様

### ◇概要

特定非営利活動法人 Table For Two International (TFT) より笹本愛子様にご講演をいただきました。TFT は対象となる定食や食品を買うと 1 食につき 20 円の寄付金が開発途上国の子どもの学校給食費用に充てられるという仕組みで世界的な食の不均衡の解決を目指している団体です。TFT の活動自体が飢餓を撲滅するための Win-Win な活動であるため、活動そのもののお話がとても参考になりました。更に、その後の質疑応答ではより広く Win-Win な事業立案について参加者から様々な質問がなされ、講義時間が終わった後も質問に長蛇の列ができるという非常に活発かつ有意義な機会となりました。



### ◇講演

講演では TFT が行っている活動紹介を中心に ご講演頂きました。どのように Win-Win となっているのか、どのような企業が参加しているのかといったことを、写真を多く使用したスライドを用いて、分かりやすくご説明頂きました。

### ◇質疑応答

質疑応答の時間は参加者から次々と質問がなされ、非常に白熱した時間となりました。まずは講義を受けて TFT の事業自体に着目した質問が出ました。具体的には、TFT のプログラムは一国の中の方がうまくいくのではないかと (例えば「マレーシアではクアラルンプールと他の地域で格差がある」というある参加者の意見)、どのような基準で TFT のメニューに適しているのかを判断しているのか、どれくらいのスパンで支援を続けているのかといったものです。その他、実際に事業を作ることに関心した質問も目立ちました。例えば、東欧で一からやるとしたらどれくらいかかるのかといった質問や、どうやって大企業にプログラムに参加してもらえたのか、また



企業にとってのメリットとはどのようなものなのかといった質問もありました。笹本様からは一つ一つに非常に丁寧にお答え頂き、参加者は非常に満足していたようです。ある参加者は自分たちのグループでは議論が煮詰まっているので、どうやって TFT のような案を思いついたのかを教えてほしいと質問をしました。笹本様はそれこそ、このような場で何人かで集まって考案したのだから、この議場からも TFT のような案が出てくるかもしれないと返答していました。この答えを受けて参加者のモチベーションも向上したようでした。

### ○Mini-Work

Mini-work では、オリンピックセンターの外に出て散策したり、昼食をとったりする過程で「日本が抱える課題を 3 つみつける」という課題にチームで取り組みました。これは日本のような国が抱える課題を見つけることで”Win-Win”となる解決策を作るヒントを得ることを意図していました。例えば、日本が食品の大量廃棄という問題を抱えていることがわかり、そのメカニズムのヒントを得ることができたらそれを飢餓と結び付けて何かユニークな課題が見つかるかもしれません。実際、各々のチームは様々な課題を見つけました。例えば、日本のレストランには英語のメニューを置いておらず外国人は入りにくいこと、日本のレストランにはハラルやベジタリアンに配慮したメニューがないこと、満員電車は移動がしにくいこと、ホームレスの人が存在していることなど挙げたらきりがありませんでした。チームはオリンピックセンターでの議論に戻った際に、見つけた課題を振り返り、解決策に生かせないか考えていました。最終的には、直接的に日本の課題と飢餓を結び付けたチームはありませんでしたが、「先進国」といわれる国が抱える課題を見ることで、「開発」の考え方を考え直すきっかけになったようでした。

### ○JICA 訪問

#### ◇講師

独立行政法人 国際協力機構 農村開発部農業・農村開発第二グループ第四チーム  
天目石慎二郎様・野口拓馬様

#### ◇概要

講師の天目石様は、「(フォーラムで参加者が Win-Win な解決策を立案しようとしているが、) 我々もプロサバナ事業を通して、Win-Win な状況を作ろうとしています。1 つの Win は現地の農家の Win、もう 1 つの Win は政府、JICA そしてプライベートセクターです。」と冒頭で語られ、フォーラムのテーマと JICA がサポートしているプ

ロサバナ事業の共通点を初めにご指摘頂きました。

前半は、JICA の農業開発協力の概要（貧困と飢餓の削減・人口増加への対応・気候変動への対応・食料価格高騰への対応・生産性の低さの改善）を示して頂いた上で、TICAD V の農業分野における戦略：“Empowering Farmers as Mainstream Economic Actors”についてお話いただきました。そして、TICAD の流れを受けて JICA が果たしている重点分野：コメの生産量の増加（CARD）、小農への市場志向のアプローチ（SHEP アプローチ）など、をご説明いただきました。

後半は、具体例として、日本・ブラジルがサポートしているモザンビークの農業プロジェクト「プロサバナ事業」の概要を説明していただきました。この中で、ProSAVANA は地域住民、特に小農の生計向上を目的としたものであること、そのための手段の 1 つとして民間企業の参画を促す開発計画の策定を目指しており、この点で“Win-Win Situation”につながることを学びました。また、事業の実施にあたっては小農の権利や財産を保護するとともに彼らの意向を尊重しており、そのために法制度の整備・ProSAVANA 向けガイドラインの策定並びに政府側人材の能力強化を進めていることを学びました。

#### ◇質疑応答の例

Q「プロサバナ事業が大規模投資を推進するものでないとしたら、どのような投資がされているのですか？」

A「契約農業を進めようとしています。土地は農民の資産であり、土地収用を伴う民間投資は、適切に進めないと企業による土地収奪を引き起こしてしまいます。しかしながら、契約農業の場合はそのようなことにはなりません。」

Q「環境保護はどのようにやっているのですか？」

A「たとえば、作物ごとの適切な施肥量を検証しており、収量の増大と環境保全の両立を目指しています。」

Q「アフリカの土地収奪に関する記事を読んだことがあります。これに関して、貴方の意見をお聞かせ願えませんか？」

A「投資は重要だが、私達はそのような土地収奪は望んでいません。実際にそのようなことは一部のアフリカの国で起こっています。ProSAVANA では、投資にかかるガイドラインを設けて、適切な投資がなされるような体制の整備と人材育成を実施していくことを検討しています。」

Q「伝統的な農業から、市場志向の農業になった時には、競争に負ける農家が出てくるのではないかと思います。そのような「ルーザー」に対してどのようにお考えですか。」

A「彼らが「ルーザー」にならないように努力をしています。事業の実施の前段階で調査を行い、需要などを調査したりするなどしており、「ルーザー」を生むリスクを最小化しようとしています。」

Q「なぜブラジルをパートナーとして実施しているのか？」

A「ブラジルは、農業プロジェクトを行った結果、大豆の生産量を大幅に伸ばし、今や世界で1番になろうとしています。彼らの経験が、モザンビークで活かされると考えます。また、モザンビーク人とブラジル人はポルトガル語でコミュニケーションが取れるという面もあります。」



## ○Oxfam Japan 訪問

◇講師

Oxfam Japan アドボカシーマネージャー 森下麻衣子様

◇概要

国際 NGO である Oxfam の事務所を訪問し、今年度の IDYF のテーマである「Win-Win」についてお話を伺いました。肯定的に捉えられることの多い「Win-Win」ソリューションを批判的に捉えなおし、その懸念点を把握するという点で大変有意義なフィードバックを行うことができました。

セッションの前半では、「Win-Win」ソリューションが注目を集めることとなった背景について解説して頂きました。ポスト冷戦の時代から近年まで、国際開発は先進諸国から発展途上国へという一方的な援助によって成り立っていました。例えば、過去の国際社会において議論的は援助のためにどの程度予算を確保するかでした。しかし先進国を中心に深刻化した不況による政府の財源不足などから、いかに公的資金を増加させるかといった議論は過去のものとなりました。そこで現在注目されてきたのが、国際開発に私企業等からの投資を呼び込む戦略です。例えば先の TICADV のテーマは“From aid to investment”でしたし、現在の日本の ODA 政策にも民間からの投資を呼び込も

うとする姿勢が強く見られます。そしてこうした国際開発の形こそ、途上国、先進国、企業それぞれに裨益する「Win-Win」なソリューションであるとされるようになりました。

しかしこうした官民連携の「Win-Win」ソリューションには課題もあります。このセッションでは、アフリカ農業開発における大規模な官民連携事業のうちの1つを具体的に取り上げ、その事業がどのような課題を抱えていると考えているかについて意見をお聞きすることが出来ました。その事業は、アフリカの農業部門に投資を呼び込みその生産性を上げ、かつ民間部門がアフリカで新たなマーケットを開拓する足がかりをつくるものでした。しかし Oxfam が行った調査によると、事業の現場で暮らす農民たちが意思決定プロセスから除外され、最貧困層には利益が届いていないのではないかという懸念が出てきました。その調査結果に対して、参加者からも「自国では経済成長に伴い投資が活発しているが、最貧層には裨益せず最貧のままだ。」と賛同の声が相次ぎました。それらを通して、「Win-Win」ソリューションの意義は大きいですがそれを正しく機能させるためには、現場におけるアカウントビリティの確保やプロジェクト目標や対象者の明確化などが不可欠だということ学びました。



## ○Second Harvest 訪問

### ◇講師

Second Harvest 理事長 マクジルトン・チャールズ様

### ◇概要

セカンドハーベストは様々な理由から廃棄予定となってしまった食料を必要としている人に届ける、日本初のフードバンクです。秋葉原の事務所を訪問し、倉庫や食べ物の受け渡し場所を見学させていただいた後、理事のチャールズ様よりご講演をいただき質疑応答を行いました。東日本大震災の際のセカンドハーベストによる支援活動に関するお話に参加者も聞き入っていました。受け取ったらお返しをしなければいけない、あるいは、皆に平等に与えられないのであれば何も受け取らないという日本の文化的特性により支援に困難が生じたというエピソードからは、参加者は文化をしっかりと理解しなければ課題解決は上手くいかないということを学んだようでした。また、無償の支援

であっても Win-Win という関係性を意識する必要性もお話いただきました。例えばフードバンクは企業の寄付により成り立っているが、それは企業にとってコスト削減や CSR 活動としてのメリットがあり、またアクター同士が対等な関係で双方の信頼の基に成り立つ関係が築けているからこそシステムとして機能しているのだというお話を伺いました。このフィールドワークを契機に、文化に配慮し、また多様なアクターをどう動かしていくのかを考えるグループが増えたことが大変印象的です。



## Day4 (3月4日)

### スケジュール

09:00~12:00 グループワーク

13:00~17:00 グループワーク

18:00~20:00 Feedback by Specialists

### □Feedback by Specialists

#### ◇フィードバック

ソーシャルベンチャー・パートナーズ東京 岡本拓也様

かいはつマネジメントコンサルティング 高梨直季様

#### ◇概要

まずフィードバックの方々にはフォーラムメンバー全員に対し、自己紹介をして頂いた後、別室に移動して2つに分かれ着席して待機して頂きました。各チームは指定の時間にフィードバックの待つ部屋に移動し、持ち時間15分の中で自分たちの考えているプランの説明をし、コメントを頂いたり質問をしたりしました。全チームがフィードバックのお2人からフィードバックがもらえるようにローテーションを行いました。

◇結果

各チームは講師の前に座るとまず軽く自己紹介をしていて、話はずみ、場が和んでいました。その後 4~5 分で自分たちのチームの案について説明し、案へのコメントを求めていました。岡本様は主に、なぜ自分たちはこのプランをやるのか、このプランが最も良いと考えているのはどうしてなのか、の 2 点を参加者に投げかけ、自分たちがやることの意義を感じているか、本当にやりたいという情熱ややる気があるかどうかを問うていました。一方、高梨様は具体的な類似例を用いて提案を行ったり、CSR やボランティアといった案の実現性を問うたりしていました。参加者はそれぞれ 2 つの観点からフィードバックを頂き、翌日の朝のチームワークでもフィードバックの言葉に言及しており、フィードバックをしっかり受け止めていた様子が見受けられました。



各チーム共に一度目のフィードバックと二度目のフィードバックの間には 1 時間の時間があったのですが、二度目の方がブラッシュアップされていると感じました。フィードバックを受けて刺激を受け、より中身を詰めて整理してきたことがフィードバックへの説明から伺えました。

## Day5 (3月5日)

スケジュール

09:00~12:00 グループワーク

13:00~17:00 グループワーク

18:30~20:30 Social Event

## □Social Event

18:30~ 開会  
18:40~ 企業プレゼンテーション  
19:15~ 自由懇談会  
20:15~ 閉会、写真撮影  
20:30 交流会終了  
参加企業（五十音順、敬称略）：  
パシフィックコンサルタンツ株式会社  
株式会社ビービット  
マルコメ株式会社

交流会では、協賛企業様と参加者の相互理解を深めることを目的とし、前半は企業様から企業概要等のご紹介を含んだプレゼンテーションを、後半はお越しいただいた企業の方と参加者の自由懇談会を行いました。民族衣装に身を包んだ参加者が出身国のお菓子を持ちより、34 か国から参加者が集まった IDYF の多様性を象徴する会となりました。





前半のプレゼンテーションでは、各企業様から 10 分ほどで会社概要や事業内容のご説明をしていただき、参加者も真剣に聞き入っていました。その後の自由懇談会では、参加者が持ち寄ったお菓子を囲み、企業様と参加者の自由な交流を図りました。懇談会中、関心を持った企業様のもとへ行き積極的に話しかける参加者の姿が見受けられました。中には日本で働くことに関心のある海外参加者や、参加企業様が出身国で行っている事業に関心のある参加者がおり、話が尽きることなく約 1 時間の懇談会の時間はあっという間に過ぎました。

懇談会を通し、企業様と参加者が互いに理解を深めることが出来、両者にとって有益な場となりました。



## Day6 (3月6日)

### スケジュール

09:00~12:00 グループワーク

13:00~21:00 グループワーク / リハーサル

### □グループワーク

最終報告会を翌日に控えた Day6 は、各チームがそれぞれ真剣に議論を行い、準備に余念がありませんでした。以下ではフォーラム中のそれぞれのグループワークでの議論の様子をご紹介します。

#### ○Team1 SERFA

##### メンバーの出身国・地域

イタリア、トルコ、日本、フィジー、ペルー

Team SERFA は「食料廃棄問題」に着目し、「Turn Waste Into Value」というコンセプトから、従来の Food Bank とは異なった、より持続可能な食料分配の施策を提案しました。

FAO によると、世界の食料生産の 1/3 は廃棄される一方で、8 億 500 万人の人間が飢餓で苦しんでいます。さらに、食料廃棄により、毎年多くの CO2 が排出され、24 兆円もの経済的損失が発生しています。このような状況の中で、飢餓で苦しんでいる人々に

廃棄される食料を届ける施策を Team SERFA は考案しました。彼らは大きな貧困問題を抱えるペルーのケースをピックアップし、いかにペルーの都市部で発生する食料廃棄を貧困世帯に分配できるかについて検討しました。

Team SERFA が提案したソリューションは単純に廃棄される食料を貧困世帯に分配するというものではなく、分配のメカニズム自体を持続可能にするソリューションです。まず、企業(主に都市部のスーパーマーケット)を現地の低所得コミュニティとつなげ、食料を供給します。NPO ではなく現地の低所得コミュニティに分配を任せることは、ニーズの把握(低所得コミュニティの代表者は低所得世帯のニーズを最も効果的に聞き取れる)だけでなく、流通や低所得者の自立支援という観点からも 大きな効果が期待できます。その中で NPO は 流通のサポートや教育などを行い、現地の低所得コミュニティの自立を促進します。

この様に本プランの優れている点は、従来の“Food Bank”とは異なり、現地のコミュニティをエンパワーメントし、持続可能な支援システムを提案したことです。また、この支援システムの実現にいたるプロセスを詳細に落とし込み、プレゼンテーションに加えている為、非常に説得力のあるプランに仕上がっています。

Team SERFA の強さは各個人の強い個性とそれをまとめる団結力にありました。また、“Food Bank”の起業経験のある参加者もいた為、現場での課題を理解した、完成度の高いプランを提案することができたと考えられます。実務によって感じたリアルな課題を経験者が提案し、それをチーム全体で解決していくことによって、実現可能性の高いプランを Team SERFA は提案することができました。また、チームメンバー全員が活発に議論に参加し、意見を出していたため、最終的には全員の意見が反映されたプランが完成できました。



## ○Team2 Red Faction

メンバーの出身国・地域

キルギスタン、中国、ドイツ、日本、ベトナム、マダガスカル

Team Red Faction は”One Gardens”という解決策を考案しました。これは、先進国の小中学校で学校菜園を推進し、その収益を途上国の学校菜園促進のために寄付する協力関係を結ぶというプロジェクトです。

このようなプロジェクトは非常に画期的なものでした。途上国では、野菜をはじめとする食料不足が問題であり、一方先進国では農業への関心を持つ若者が少ないという問題が残存しています。そこで、上記のような契約を先進国と途上国の学校間で結びます。すると、先進国では農業教育が強化され、幼いころから農業に親しみ興味を抱く子供が増えます。一方で途上国では先進国の学校から送られてくる収益によってより農業技術・食糧生産が促進され、食料問題の解決に寄与するようになります。先進国と途上国の双方の社会問題を解決する、まさに”Win-Win”なプロジェクトです。

学校を利用するというアイデアは中々既存の枠組みに囚われている発想からは出てこないものです。このチームは常に和気藹々と議論を進めている様子が印象的でした。国は違っても楽しいものを楽しんでいるのは一緒。時にはふざけあい、時には真剣に議論を進める様子が他のチームと比べても際立っていたように思います。そのような自由な空気がこのようなアイデアを生んだのではないのでしょうか。



## ○Team3 Yallah

## メンバーの出身国・地域

ウガンダ、韓国、ギリシャ、日本、パレスチナ、ベトナム

このチームは、飢餓に苦しむシリア難民の女性を、職業訓練等を通してエンパワーメントし、先進国でレストラン予約サイトや旅行紹介サイトを通じたファンドレイジングを行うというプランをつくりました。シリア周辺地域では、戦乱によって夫を失った女性が極度の貧困の下で残された家族を養っていかねばならないというケースが大変多くなっています。こうした状況が存在するにも拘わらず一方向的援助の資金源は縮小しているため、多くの女性がなす術もなく性産業に従事してしまっています。そこで持続可能なファンドレイジングプロセスの必要性を感じたこのチームは、先進国のオンライン予約サービスに目を付けました。外食産業は現在オンライン予約サービスに多額の利用料や広告費を支払っていますが、それによって生まれる利益がシリア難民の支援に回ればその出費が企業ブランドの強化にもつながるのではないかと考えたのです。彼らはレストラン予約サイトや旅行紹介サイト上で難民支援に協力する企業・店舗を明示し、その店を選ぶ顧客の数に比例してウェブサイト利用料の一部が難民支援に用いられるシステムを考案しました。さらにそのウェブサイト上の特設ページで、難民への職業訓練の結果制作された商品を先進国向けに販売することにしました。それによって本プロジェクトの経済的持続可能性をより高度なものにしたのです。

この班はパレスチナ、ウガンダ、ベトナム、日本、韓国、ギリシャからの参加者で構成されており、非常に議論に対して活発なメンバーが集まっていました。そのため初期段階で目標とする社会やターゲット層は定めることが出来たものの、そこへのアプローチに関しては様々なアイディアが乱立し、議論は再三紛糾しているようでした。しかしその分だけチームの結束力も高まったこともあり、最終報告会の2日前の段階ではプランについても合意が生まれ、分業の下で効率的かつ質の高い作業が実現されていました。全てのメンバーが自分の意見をしっかりと主張し、かつ相手の主張にもしっかりと耳を傾け、合意が出来次第すぐさま分業体制に移っていく様子は見事で、各メンバーの強い個性と高い能力が光ったこの班ならではのものではなかったと思います。



#### ○Team4 GIMAJI

##### メンバーの出身国・地域

アゼルバイジャン、イタリア、インド、日本、ミャンマー

このチームは農業が戦略的に計画されていないという問題に着目し、“Win-Win-Win”となる壮大なプランを打ち立てました。Google Earth を用いて世界のどこで何が栽培されているかをデータ化し、その統計的データ分析を教育された若者や農家に行わせ、農業計画を行うというものです。これによって、農業が計画的に行われることで摂取できる食糧の偏りを減らすという Win、若者や農家が Tech-Farming の教育を受けられるという Win、更には需給の調整により価格が調整されて安定的に低価格で食糧が得られるという Win、の 3 つの Win が到達できると主張していました。

GIMAJI の特筆すべき点は、そのチームワークです。インド、ミャンマー、アゼルバイジャン、日本、イタリアというバラバラの国籍を持ちながらも、誰しもがチームワークに関わり、常に全員で話しあい、他のチームに比べても非常にバランスがとれたチームでした。早期にとりかかりたい課題を特定した上で 2 つの案を考案していました。最終報告会で発表した案と、飢餓が生じているのを見つけた人が google map 上にピンを挿すと、食糧がそこに届けられるというシステムの開発案です。Day4 までは双方を掘り下げ、比較、議論していました。リハーサルの前日である Day5 にはもうすでに案を絞り、最終報告会で使用するパワーポイントの作成にとりかかり、動画を挿入するとい

った工夫も見られました。



#### スタッフコラム

アイスブレイクのチーム分けの際、私たちはスライドで各参加者の国の国旗を表示していたのですが、ある国の参加者が、国旗を表示してほしくないと訴えてきました。私たちが表示していた一般的な国旗は現政権の使用する国旗であり、彼曰く弾圧・迫害の象徴であるそうです。その参加者は、反政府側が利用している旗が自由と平和の象徴であり、そちらを利用してほしいとのことでした。

このように、同じ「国籍」を有する人でも、その国家や国旗に対する感情は様々であり、特に多様な背景を有する参加者が集まる IDYF では、国籍だけで捨象してはならない、個人個人のアイデンティティにとりわけ配慮する必要があることを改めて痛感しました。また、このような生の感情の機微は、実際に会って話してみないと分からないということも学んだ出来事でした。

## ○Team5 Fabulous Five

### メンバーの出身国・地域

アルジェリア、インドネシア、コスタリカ、スペイン、日本

このチームは飢餓を「必要な栄養素の不足」ととらえ、先進国とも言われるスペインにおける主に貧困層の栄養価の偏りに注目しました。栄養不足の解決策として打ち出したのが“Urban Garden”です。都市の空き地で野菜や果物など近隣の“Food Desert”で必要とされる食料を栽培し供給するシステムです。プロや学生のボランティアを“Urban Garden”の運営主体とし、資金調達の面では企業を取り組むことで持続性や実現可能性を高めた政策となりました。

このチームはあえて途上国ではなく先進国における課題に着目することでプランの新規性や今後の有用性が高まるとし、早い段階から問題意識を共有していました。スペイン出身のメンバーがスペインにおける栄養価の偏りの問題を他のメンバーに共有し、また空き地がある状況など解決策につながる現状も細かく共有することで全員が状況を把握できるよう工夫していました。状況が把握できると、プランのために検討すべき項目を丁寧にホワイトボードに整理し、分担してリサーチしていた姿にもメンバー間の信頼や協力体制が上手く築けていたことが表れています。

さらに、スペインのどこで実行するのが有効か、活用できる人材はどれぐらい存在するのかなど、現実に即したプランにしようと広く深くリサーチしていたことがプランの具体性にも反映され、高評価へとつながりました。フィードバックを受ける前は、学生が本当に栄養価の偏りを解決するような“Urban Garden”を運営できるのか、資金は本当に調達できるのかなどプランの欠点が多く存在したものの、フィードバックでそれらを指摘された後は、ステークホルダーの分析をチーム全体で行いプランを洗練させていき、“Urban Garden”という理想のプランをより現実的な形に落としこみ、シンプルでわかりやすい、説得的なプレゼンテーションを最終報告会にて行いました。



### ○Team6 Campai

メンバーの出身国・地域

アメリカ、シリア、日本、ベトナム、ベラルーシ、ベルギー

このチームは、西アフリカの飢餓に着目し、その原因を現地の小規模農家の知識不足に起因する農業の生産性の低さにあると考えて議論を行いました。解決策として打ち出したものが“Farming Masters”というプログラムです。このプログラムでは、農業に関係のある分野に専門をもつ修士の学生と、小規模農家をマッチングさせ、学生をインターンとして農家に派遣することで効率的な農業の技術移転を行うことを狙っています。マッチングは、現地の組織から集めた農家のニーズの情報と大学が集めたインターンシップを探している学生の情報をウェブサイト上で同時に集めることで行い、インターンシップは、農家がインターン生の職住の世話をすることで学生の経済的な負担をなくすような仕組みを提案しました。

このチームは Day4 には提案の大枠を完成させていました。しかしながら、Day4 のフィードバックの時間には、1人目のフィードバックの方に事業の内容をうまく説明することが出来ず、分かりやすく人に説明することの重要性と難しさをいち早く認識していました。1人目と2人目のフィードバックの間の1時間では他のチームが疲労から休憩を入れている中、プレゼンテーションの練習に打ち込んでいたのがとても印象的でした。





### ○Team7 Roots

メンバーの出身国・地域

ウクライナ、コロンビア、スウェーデン、日本、ブルキナファソ、マレーシア

Team Roots はマレーシアの首都クアラルンプールにおける問題に着目し、Farm2City というプロジェクトを提案しました。

WHO によると、マレーシアはアジアの国々の中で肥満率が比較的高い国であり、その値は 40%を越えています。この肥満率の高さの原因の 1 つには栄養不良、つまり適切な栄養価を取ることが出来ていないことがあると考えられます。特に City Worker は日々の仕事で忙しく、なかなか適切な食生活を送ることができません。一方、クアラルンプール近郊の小規模農家は社会の中で最も貧しい状態にあります。彼らは商品の売買にあたって卸売業者からわずかなお金しか手にすることが出来ておらず、栄養価の高い食事を確保することも簡単ではありません。Farm2City はこの都市の肥満と郊外の小規模農家の窮乏という 2 つの問題を結び付け、解決を目指すプロジェクトです。

まず小規模農家は、栄養価の高い食材の詰め合わせ (Fresh Products Box) を用意し、直接販売します。City Worker はそれをインターネット上で注文します。時間のない City Worker が利用しやすいように、配達時間を指定できるようにします。この Farm2City プロジェクトでは次のような Win が生まれます。まず小規模農家は仲介業

者を省いた詰め合わせの販売から従来よりも高い収入を得ることができます。次に **City Worker** はこの食材を日々の食事に使うことでより質の高く多様な栄養素を得ることができます。そして、この詰め合わせの輸送に伴い、若者を中心とした職がない人たちに雇用を創出することができます。

**Team Roots** は飢餓という言葉からはなかなか連想されにくい都市の栄養不良による肥満問題にアプローチしましたが、メンバーの1人がマレーシアで働く栄養士であったことも手伝いこのアイデアが生まれたようです。問題は何か、目指すべき理想の社会はどのようなものか、などしっかりとブレインストーミングを行い、チームで段階を踏んで着実に議論を進めていた様子が印象的でした。またメンバーの1人が「問題をクアラルンプールに絞ることによってしっかりとしたデータを集めることが出来、真に実現可能性のある案を作ることが出来るのだ」という風に述べており、実際に自分たちで問題を解決するのだという気持ちを常に感じる事が出来ました。



### ○Team8 ∞ (Infinity)

メンバーの出身国・地域

ザンビア、スイス、スロバキア、日本、フィリピン

このチームはパスモのような交通システム(Pasmore)を使い、その利益の一部を自分たちが運営する NGO の資金源として得て、ザンビアでの農業支援事業を行うというアイデアを考案しました。

当初は教育や政治システムについても議論を行っていたようですが、国をザンビアにしぼり、ザンビアの課題である水と食料の問題にフォーカスすることを決定した後は、

ザンビアの農業支援を行うのに加え、その事業を実現するためのファンドレイジング案をブレインストーミングして、6つのアイデアの中から交通を選びました。交通を選んだのは、なくなることがなく、チーム名の∞にも表れている持続可能な方法を実現できると考えたからだそうです。

Day4のフィードバックでは、「企業側のメリットをもっと考えれば win-win な関係を作れるのではないか」、「特に JICA がバングラデシュで導入した電子マネーシステムが成功しているように、まだ電子マネーが導入されていない国で始めれば、企業の側にも無賃乗車が防げるのではないか」というアドバイスを受けました。当初はすでにパスモのようなシステムが確立している先進国の企業に協力してもらい、一部を寄付に回すシステムを考えていたようですが、このフィードバックを受けて、先進国でもまだ IC システムが導入されていない国を対象とすることになりました。

最終的に出来上がったのが、スイスでパスモのようなシステムの導入に興味を示す企業と協力し、乗客が、乗った距離に応じて、何 km につき何円、というようにザンビアでの農業支援のための寄付ができるという仕組みです。その寄付金によって、ザンビア農家のトレーニング、生産性向上のためのセミナー、農具の支援などを行います。審査員への配布資料も力が入った出来栄で、かなりスムーズに議論が進んだチームだったと思います。



## Day7 (3月7日)

### スケジュール

09:00~11:00 最終報告会準備  
13:00~17:00 最終報告会  
19:00~21:00 Farewell Party

### □最終報告会

開催場所：独立行政法人国際協力機構 東京国際センター講堂

タイムスケジュール：

13:00~ 開会式  
13:05~ パネルディスカッション  
13:40~ 各チームの解決策発表  
15:50~ 選考  
16:10~ 結果発表・講評

パネリスト・審査員（順不同、敬称略）：

藤田伸也 外務省  
田中耕太郎 独立行政法人国際協力機構（JICA）  
西岡はるな Hunger Free World  
齊藤吉洋 ADRA Japan

学生から社会人まで、幅広い年齢層の様々な立場の方々約 150 名に参加登録を頂きました。

### ○パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、審査員を務めていただいた外務省の藤田様、独立行政法人国際協力機構の田中様、Hunger Free Worldの西岡様、そしてADRA Japanの齊藤様にパネリストとしてご登壇頂き、それぞれの立場から “The role of each actor in the field of development hereafter -How can each actor contribute to development in this diverse world?- 「今後の開発における



それぞれのアクターの役割—多様化した世界でそれぞれのアクターは如何に開発に貢

献できるのか?—)」というテーマについての意見をお聞きしました。

外務省は外交問題を担う立場であり、全体的・包括的な指針を打ち出し、調整することで国際開発に貢献しています。JICA も外務省と同じく公的な機関ですが、外務省と比べてより日本と諸外国との二国間の関係を担う **Bilateral Agency** としての役割を有しています。Hunger Free World と ADRA Japan は共に NGO であり、より地域に根差した活動ができること、より柔軟な活動を行うことができることが NGO の大きなユニーク性であるということでした。加えて ADRA Japan の斎藤様からは、自らのビジネスマンとしての経験を踏まえ、ビジネスセクターをうまく活用することも国際開発において重要性、必要性についてもお話いただきました。



フォーラム参加者を含む観覧者からは「お互いの組織の関係性は良好なのか」など多くの質問が寄せられました。観覧者は国際開発に高い関心を有していたため、多くのユースにとっては将来の進路、また今現在働いている人にとっても自分が国際開発にどのようにかかわることが出来るのかを再度考えるにあたって、非常に参考になるパネルディスカッションとなりました。

## ○解決策発表

### ・ Team1 SERFA

このチームは「食料廃棄問題」に着目し、“Turn Waste Into Value”というコンセプトで革新的な Food Bank システムを提案しました。このシステムは、NPO ではなく現地の低所得コミュニティに分配を任せることで、ニーズを的確に把握し、かつ低所得者の自立支援も同時に達成することが出来る画期的プランでした。

### ・ Team2 Red Faction

先進国の小中学校で学校菜園を推進し、その収益を途上国の学校菜園促進のために寄付する協力関係を結ぶというプロジェクトを提案しました。途上国では、野菜をはじめとする食料不足が問題であり、一方先進国では農業への関心を持つ若者が少ないという問題が残存しています。このチームは、その二つの課題をつなぐことで Win-Win なソリューションを創り出しました。

### ・ Team3 Yallah

極度の貧困や飢餓に苦しむシリア難民の女性に着目し、先進国でレストラン予約サイ

トや旅行紹介サイトを通したファンドレイジングを行うことで彼女らに職業訓練等のエンパワーメントを実施するプランを発表しました。

・ Team4 GIMAJI

このチームのアイデアは、Google Earth の先進技術を用いて世界のどこで何が栽培されているかをデータ化し、その統計的データ分析を教育された若者や農家に行わせ、農業計画を行うというものです。これによって、農業が計画的に行われることで摂取できる食糧の偏りを減らすという Win、若者や農家が Tech-Farming の教育を受けられるという Win、更には需給の調整により価格が調整されて安定的に低価格で食糧が得られるという Win、の 3 つの Win が到達できるというものです。

・ Team5 Fabulous Five

先進国スペインの貧困層が抱える「栄養不足」という形の飢餓に着目し、“Urban Garden”の発達により都市部の“Food Desert”で必要とされる食料を栽培し供給するシステムを発表しました。

・ Team6 Campai

農業従事者の知識不足に起因する西アフリカの飢餓に着目し、農業分野の大学院生と小規模農家をマッチングさせ、学生をインターンとして農家に派遣することで効率的な農業の技術移転を行う“Farming Masters”というプロジェクトを発表しました。

・ Team7 Roots

マレーシア、クアラルンプールの都市部における肥満問題と郊外の小規模農家の窮乏という二つの問題に着目し、小規模農家が都市部住民向け健康食材ビジネスを行う Farm2City というプロジェクトを提案しました。

・ Team8 ∞ (Infinity)

このチームが提案したのは、スイスでパスモのようなシステムの導入に興味を示す企業と協力し、乗客が、乗った距離に応じて、何 km につき何円、というようにザンビアでの農業支援のための寄付ができるというシステムでした。その寄付金によって、ザンビア農家のトレーニング、生産性向上のためのセミナー、農具の支援などを行うことができます。

## ○審査結果

審査にあたっては、5 つの基準（Novelty 新規性、Feasibility 実現可能性、

Sustainability 持続可能性、Effectivity 有効性、Compatibility 両立性) を用いて、4名の審査員による厳格な審査が行われました。その結果、以下の3チームがより優れた解決策を提案したとしてチームとして表彰されました。

第1位 Team6 Campai

ユースならではの視点を生かしたプロジェクト内容であり、また Win-Win の形が明確かつ実現可能であったことが高く評価されました。

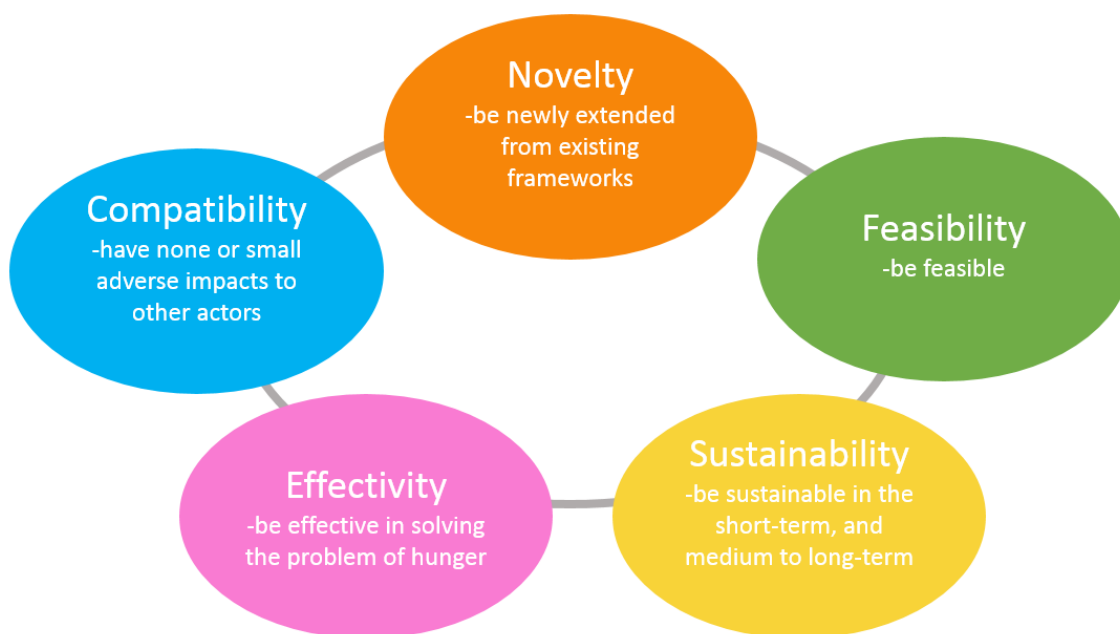
第2位 Team5 Fabulous Five

見過ごされがちな先進国の慢性的飢餓問題を取り上げた点や比較的小さな規模で大きな成果が得られる Win-Win の形を提案した点が高く評価されました。

第3位 Team8 ∞ (Infinity)

参加者自らが使用していた「PASMO」をベースに Win-Win なプロジェクトが構成されており、その革新性とユースならではのアイデアが高く評価されました。

\* 審査基準





(最終報告会終了後の集合写真)

## Day 8 (3月8日)

### スケジュール

09:00~18:00 Optional Tour

### □Optional Tour

最終報告会翌日の3月8日(日)に東京近郊を観光するオプションツアーを開催しました。参加したのはスタッフ7名と参加者31名を合わせた38名で、会期中のチームの枠や「参加者」「スタッフ」という枠を越えて楽しい時間を過ごしました。当日は朝から皆で浅草を訪れ本格的なお寿司と観光を楽しみ、その後スカイツリーグループと高尾山グループに分かれて観光しました。

#### ○観光の様子

##### (1) 浅草

前日までのハードワークにも拘わらず朝9時前に宿泊施設を出発し、まずは浅草でお寿司の朝食を堪能しました。生で魚を食べる習慣がない参加者のほうが多いという状況でしたが、寿司は日本の文化として既に十分に認識されており、楽しみにしていたという参加者もあればこわごわと食べる人もいたものの、それぞれ日本の食文化を楽しんでいました。



朝食後は随時浅草寺の観光や仲見世通りでのショッピングを楽しみました。お土産物屋が多く集まる仲見世通りでは、参加者がそれぞれ母国の家族・友人へのお土産を選んでいました。また浅草寺ではおみくじを引いたり、ご利益があるという煙を浴びたり、雷門の前で写真を撮ったりと日本文化を満喫していました。ある参加者は浅草寺を見て「日本の木造の建築はヨーロッパの建築と違った趣があつて素晴らしい」という感想を述べていました。



### (2) スカイツリー

浅草観光後、スカイツリーグループは徒歩で15分ほどかけてスカイツリーに向かいました。「日本のテクノロジーをこの目で見たい」という参加者もあり、スカイツリーの巨大な姿を目にすると多くの参加者はその大きさにしばし圧倒されていました。地上350メートルにある展望台からは、あいにくの曇天でしたが東京の街並みを一望することができ、参加者たちはその360度の景観を楽しんでいました。

スカイツリー付近で遅めの昼食を取った後には電車を乗り継いで秋葉原へと向かいました。秋葉原という街は参加者にも有名であり、アニメ・マンガに興味を持つ人、電化製品の買い物をしたい人、または猫カフェに行きたい人などそれぞれ行動し、めいめい買い物を楽しみました。

日本の古い町並みの浅草から始まり、テクノロジーの結晶であるスカイツリーに上り、アキバで買い物を楽しむという盛りだくさんのツアーとなりましたが、参加者は疲れた様子も見せずに日本での体験を楽しんでいました。

### (3) 高尾山

高尾山グループは浅草観光を早めに切り上げ、電車で1時間半ほどかけて東京郊外の高尾山を訪れました。3月8日は、ちょうど一年に一度の「高尾山火生三昧火渡り祭」が開催される日だったので、日本人参加者も含めて皆が楽しむことができました。特に山々に響き渡る法螺貝や読経の音や天高く燃え上がる炎など、これまで東京の都心しか見たことがなかった参加者にとっては大変興味深いものがあったようです。

お祭りを見学した後は、ケーブルカーで高尾山中



腹まで登り、高尾山薬王院等を観光しました。修験道の信仰が色濃く反映された寺院を見学したことで、午前中に見学した浅草寺とは異なる文化を学ぶことができました。帰り道では、7日間の会議の疲れと当日一日歩き回った疲れとが重なり、ほとんどの参加者が車内で眠りについていました。



## 第3部 参加者の声

---

### 参加者アンケート

IDYF の魅力、IDYF で学んだこと、IDYF の改善点について参加者にアンケートを行いました。その結果の一部を以下に抜粋します。

#### IDYF の魅力的な点は何？

- ・異なる価値観や意見を持った人々と議論ができること
- ・実現可能な解決策を考える機会が得られること
- ・異なる国々の人々と交流し、課題解決に取り組める機会が得られること
- ・日本で開催されていること
- ・世界中のユースが集まっていること
- ・“Hunger×Win-Win” というテーマ
- ・運営がしっかりしていること
- ・あらかじめ決められたチームメンバーと課題に取り組むこと
- ・しっかりした、効率的な運営

#### IDYF で学んだことは何？

- ・人はそれぞれ異なる価値観をもっていること
- ・英語で調整し相手を納得させる方法
- ・意見を明確に主張することの大切さ
- ・価値観の多様性と異なる意見を一つの意見に集約させる方法、またそのむずかしさと面白さ
- ・マーケティングのノウハウが必要であること
- ・他人と共に課題に取り組む力、飢餓についての知識
- ・異なる文化について
- ・チームで課題解決する方策
- ・開発に関する見識
- ・異なる文化から来た人々の考え方、感じ方、行動など
- ・多様な分析手法
- ・日本の文化
- ・他の国との経済、政治、社会の相違点と共通点

- ・日本の組織や NGO について
- ・飢餓を解決する方策
- ・異なるバックグラウンドをもつ人々が考える独創的な飢餓に対する解決策
- ・チームで課題解決に取り組むときに必要な忍耐力

#### IDYF をよりよくするために必要なことは何？

- ・食事のバリエーションを増やす
- ・異なる考え方（宗教など）への配慮
- ・奨学金を増やす
- ・日本人以外の運営メンバーを入れる
- ・より多くの分析手法を紹介する
- ・参加者としてではなく意見を交換するために日本の大学生を呼ぶ
- ・Wi-Fi 環境を改善する
- ・実際のプロジェクトを一から参加者が学ぶ機会を提供する
- ・日本文化を紹介する時間をつくる
- ・自由時間を増やす
- ・講義を増やす

## Memory of IDYF2015

フォーラム後、参加者から自由に Memory of IDYF2015 と題してそれぞれの IDYF での思い出を書き表してもらいました。その中から 2 人の Memory を紹介させていただきます。

### Memory of IDYF 2015 by Ms. Alicia Rojo Santos, from Spain

In Spain, we like to say that many things in life cannot be taught at high school or at university; they are learnt in 'la escuela the la vida' (the school of life). I think this reflects perfectly the spirit of IDYF2015: it is an intensive, 1 week course in this *escuela*, a topic to be learnt by all of the future leaders and change-makers that not many university lecturers can easily convey with words.

Coming back to reality was hard. My mind was full of thoughts, of plans, of wishes, of memories... People kept asking how Japan had been, what I had done... My answer was always the same: 'I've done and learnt so much that it's hard to tell right now.' It is only now, more than two weeks later, when I can actually reflect upon what I've experienced.

First, I have a few thoughts on diversity. Human beings are a paradox: we're all so different, but at the same time, so similar! IDYF2015 brought together 44 wonderful people of 34 different countries – each with different stories, different backgrounds, different religions, different experiences and different ways of understanding life. It is certainly a challenge to sit down with 4 or 5 people, each from distinct continents, and try to come up with a project to combat hunger. As Sayo, one of the co-presidents, said in her final speech, we all have different understandings of what hunger is, of what should be prioritized in life... We all think in a unique manner according to where we come from and what we've lived. However, diversity is a funny thing. Because, deep inside, it makes us realize that whatever makes us distinct, we're all just a bunch of humans working together. If there's something I've learned thanks to IDYF is that diversity is something wonderful and enriching that can illuminate you and teach you that your perspective is only one of many thousands. And still, you can reach a common agreement, and come up with a solution to any challenges faced.

So thanks, IDYF. Thank you, 44 amazing human fellows that made my journey to Japan one of the best experiences ever. You can't imagine how much you've changed my life in just one week.

スペインでは、「人生の多くのことは高校や大学では学べない、それを学ぶのは『人生という学校においてである』」とよく言われます。私は IDYF2015 の精神はこの言葉に完全に当てはまるものだと思います。IDYF2015 で過ごした一週間はとても濃い「学校」での生活であり、そこに集った未来のリーダーでありチェンジメーカーであるメンバー全員から学んだことは、多くの大学の講師が簡単に教えられるものではありませんでした。

現実に戻るのとはとても大変なことでした。IDYF での思い出、願い、将来についてなど多くのことで頭も心も満たされ、周りの人に「日本はどうだったか、何をしたのか」と尋ねられても、いつも「今は語るができないほど多くのことを学んだ」としか答

えることができませんでした。IDYF が閉会して 2 週間たった今、やっと自分の経験を振り返ることができるようになりました。

まず、「多様性」というものについて多く考えさせられました。人間というのはいち異なる存在であり、しかし似たような存在であるという矛盾をはらんだ存在だと思えます。IDYF2015 には 34 カ国から 44 人の素晴らしい仲間が集いました。一人一人、異なる経験や背景をもち、異なる宗教を信仰し、異なる価値観をもっていました。そのような異なる大陸から日本に集まった人々が 5~6 人で 1 つのグループを作り、飢餓を解決するプロジェクトを考えるということはとても難しいことでした。

共同代表の一人である Sayo が閉会の挨拶で言っていた通り、飢餓というもののとらえ方も人生の中で何を大切にしたいかさえも一人一人異なっていました。出身地や経験してきたことが違うために、メンバーは各々異なる考え方をしていました。しかし、多様性というものは面白いものです。というのも、奥深くでは多様性というものによって、お互いにどれだけ違っても、自分たちは一緒に課題に取り組む人の集まりだということに気付いたからです。IDYF という経験をして本当に良かったと思えるのは、多様性というものは素晴らしいもの、自分自身を輝かせてくれるものであると気づけた同時に、多様性が存在する場で過ごしたことによって、自分の価値観は数千とある価値観のうちの一つでしかない素晴らしいものであることに気づくことができたからです。そして、異なる価値観をもつ人々の間でもなお、一つの考えに辿りつくことができ、直面した課題に対する解決策を生み出すことができるのです。

IDYF には本当に感謝しています。また、日本での経験を人生のうちで最高の経験にしてくれた 44 人の素晴らしい仲間にも感謝しています。たった一週間でしたが誰にも想像できないほど自分の人生を変えてくれた時間でした。



## Memory of IDYF 2015 by Mr. Ryosuke Shimizu, from Japan

When we have to say goodbye on the last day, I was almost crying thinking that 8 days with much toughness and full of joy came to an end. I was so surprised to myself because I seldom cry in everyday lives. Of course, I didn't expect that I would cry after finishing IDYF. Then, I want to look back on those wonderful 8 days.

On the first day, I was very nervous because this forum was the first place for me to discuss and live with foreigners. Actually, my feeling at that time was like 'I have to survive for 8 days' though after some days the forum was very comfortable and satisfying place for me.

In the beginning, I was in a severe circumstance. Our discussion got much complicated and was stagnant. I felt it was almost impossible to come to a decision and above all, I couldn't get fulfillment of my contributing to our team. Then, I determined that I should find a way to contribute to our teamwork and trying to tackle that way as much as I could. Since then, I tried desperately to tell what I wanted to say, propose ideas, and make presentation materials. I'm not entirely sure I could contribute to the teamwork, but I felt satisfied to a certain extent. And before I knew it, my state of mind had changed from "I have to survive" to "I want to be in here as long as possible".

I want to thank all of my teammate and other participants from my heart. They tried to hear my clumsy English and grasp my intention. I wished I could speak in Japanese during discussion again and again, but that was a good experience for me to learn.

And then the time to part came suddenly on the last day. I felt sad thinking that we would probably never gather again at the same place. But I changed my mind at once and I thought it was worth deeply appreciating by the mere fact that a variety of people from all over the world got together and nurtured warm friendship. Moreover, we have many chances to meet again in the future because we are still YOUTH!!

最終日に共に過ごしたメンバーに別れを告げるとき、困難がたくさんありつつも満たされていた1週間が思い出され泣きそうになりました。普段泣かない自分がこんな思いになるなど自分でも驚きでした。もちろん、IDYFが終わるころに自分は泣くだろうとは思っていませんでした。自分が泣きそうになるほど思い出深いIDYFでの一週間を振り返りたいと思います。

IDYF 初日、海外から来た人々と過ごし、議論するという事は初めてだったこともあり、とても緊張していました。実際、初日は一週間をどう「生き延びるか」というように考えてしまうほど緊張していました。しかし数日たつとフォーラムでの生活はとても居心地がよく満足の行くものとなっていました。

議論が始まったばかりの頃はなかなかうまく進まず、議論は複雑になり、停滞していききました。1つの解決にいきつくのも無理だと思った上、自分自身チームに貢献できていないという思いもあり一度は落ち込みました。しかし何とか自分たちのチームの議論に貢献したい、その打開策を見つけたいと思えるようになり、それ以来最大限の努力をし、自分の言いたいことを必死に伝え、アイデアを出し、そしてプレゼンテーションの準備にも全力で取り組みました。自分がチームに貢献できたか自信はありませんが、ある程度満足の行く取り組みができたと思えるまでになり、「何とか一週間耐えなければならぬ」という思いはいつの間にか「フォーラムにできるだけ長くいたい」という思いに変わっていました。

チームメートや他の参加者には本当に感謝しています。自分のつたない英語もしっかりと聞いてくれ、意図をくみ取ろうとしてくれました。議論が日本語であればいいのにと何度も思いましたが、結局はとても良い経験となりました。最終日の別れの時は突然訪れ、同じ場所には二度と一緒にいることはないのではないか・・・そんなことも考えました。しかし、そもそも世界中の多様な人々が一緒に集まり、そして強い絆で結ばれたこと自体が貴重なことであり、一生の別れではない、ユースであるからこそ将来また出会う機会がたくさんあるのだと今となっては思います。





## OBOG からのメッセージ

IDYF の理念である **Design Our Future** はフォーラムが終わった後もその重要性を失うものではありません。今回の開催で 3 年目を迎える IDYF には、およそ 100 名の OBOG が存在しており、多くの OBOG が世界中でそれぞれのやり方で **Design Our Future** を実現しています。今回は IDYF2014 参加者の Sergio Vanegas、また初年度である IDYF2013 共同代表の池上京からメッセージをいただきましたのでご紹介します。

### どうやったら私達若者が”未来をデザイン”できる？

私は、私達若者が未来をデザインするためには、恐れることなくまず「やってみる」ことだと思います。自分のコミュニティのために、大学のために、ご近所のために、街のために、環境のために、何かやること。どんなに小さく思ってもやってみれば、世界に大きな違いを生み出すはずです。私の名前はセルジオ・ヴァネガス、25 歳です。IDYF2014 の参加者でした。

IDYF の一番の思い出は、国境を越えた友情に加え、自分自身の潜在的な力を信じる確信を得ることが出来たことです。若いゆえに、私達は自ら開発に関するアイデアやプロジェクトを提案しても聞いてもらえないという現実慣れてしまっています。しかし、IDYF は私のチェンジメーカーとしてのポテンシャルを信じさせてくれ、私たちのコミュニティや国の将来へインパクトを与えるために必要な力である若者の能力、エネルギー、自分を信じる後押しをしてくれました。また、IDYF は日本へ行くという、ほぼ叶えることが不可能であった私の夢を叶える手助けをしてくれました。IDYF での経験は今日、私の個人的なそしてプロフェッショナルとしてのキャリアの中でも大きな思い出となっています。

私は人口 4 万人の小さな中南米の国コスタリカ出身で、コーヒー生産がさかんな田舎の街で育ちました。この場こそが私の開発に対する情熱の始まりでした。私は、開発は政府から与えられるものでも国際機関から与えられるものでもないことを理解していました。開発はそれにかかわる人々こそが同じゴールに向かって取り組んだ時にこそ可能になるものだと学んでいました。私は個人的な取り組みとして、都市と地方の教育格差に関心があり、私は地域で初めての公共の図書館を運営しています。この図書館は 1500 冊以上の蔵書があり、卓球などができるゲームルームやコンピュータールーム、そして子ども達のための部屋があります。また、第二言語に小さいうちか

ら触れられる環境を作るために、3歳から6歳の子ども達に英語を教えるプログラムも始めました。

さらに私は、社会的リスクを抱える、13歳から17歳の国の疎外地域にいる青年達のための都市計画の共同ディレクターも行っています。このプログラムは若者の発展にとって不可欠なツールを与えることに焦点を当てており、スポーツ、教育、家族、リーダーシップの形成の4つの柱に基づいています。若者は、これらの分野すべてにおいて自身を成長させ、人生で成功するよりよいチャンスを得ることが出来るのです。

私はコスタリカにラテンアメリカ地域事務所を持つ国際的な企業 P&G でジュニアマネージャーとして働きながら、自由な時間を使いこれら2つのプロジェクトを運営しています。IDYF は、社会的事業に取り組み続けるために必要な力を私に与えただけでなく、私達が直面するプロジェクトの課題に対する新しいツールと革新を可能にする方法を与えてくれました。

信愛なる皆さん、未来は明日ではなく、今日にあることを忘れないでください。自分の殻を打ち破り、正しいと思うことを行い、あなたのコミュニティのためになることをやってみてください。「失敗」を恐れることはやめましょう。失敗を避けることは出来ないのですから。我々は価値あることを行うことを定められているのです。我々はただそれを信じ、辛抱する必要があります。私達自身のみが、私達の行動により、私達が望む未来を設計することが出来るのですから。



IDYF2014 参加者 Sergio Vanegas From Costa Rica

## IDYF に寄せて

2012年の夏、私は初めて上海の地を踏みました。世界2位のGDPに達し、更なら発展を続ける中国において、100年前から経済の中心であり続ける上海。おびただしい数の高層ビルが並び、人々の喧騒に溢れたその街に、私はまるでニューヨークや東京にいるような気分になりました。実際に街を歩いてみれば、そこには昔からの人の生活があり、文化があり、歴史があり、僕が見てみたかった「中国」があったわけですが、一方で摩天楼群に覆われた街は無機質で個性の無い存在に見えました。そこに、イメージの「中国らしい中国」を求めてしまうのは、もしかするとエゴなのかもしれません。けれど、発展に伴って失われていく何かが、必ず存在すると感じました。

それは私たちの生きる日本でも同じです。かつてジャパンアズナンバーワンとも呼ばれた日本。実際、生活は豊かです。本当に日本に生まれて良かった、そう思うことも多いです。しかし、朝の通勤電車でひしめき合って会社に行き、無個性なベッドタウンで暮らしていると、まるでブロイラーの牛のような生活をしている気になることがあります。

しかし、世界にはその日を生きる事すら難しい人々も何億人、いや10億人以上もいて、私が感じる発展への違和感なんてものは、持つ者の贅沢な悩みであり、むしろ今、どのような手段を用いてでも発展を生み、豊かな生活を手に入れたいという意見も多いでしょう。

私の夢は、少しでも多くの人々に、自分の人生を切り開くチャンスが与えられる、そんな社会を、特に厳しい環境にある発展途上国に創ることです。その前提として、目指すべき社会の在り方、そしてその実現のために取るべき手段は何なのか、改めて考えてみたい、そう思いました。

そのために、様々なバックグラウンドを持った、これからの世界を背負う優秀な若者が一同に集まり、幸せとは何なのか、私たちが目指す理想の社会の在り方とは何なのか、率直な意見を語りあい、何ができるのか、フレッシュな視点から創り出していく、そんな場を創りたいと思い、IDYFを私は立ち上げました。

あの夏からもうすぐ3年が経ちます。

私は今、日本の開発援助機関であるJICAで働いています。仕事に取り組む中で、いつも根底にあるのはIDYFを立ち上げた際も感じた問題意識です。理想の社会とは何なのか？そのために何をすべきなのか？単純に目の前の仕事に取り組むだけではなく、その根底にある、目指すべきものが何なのか、それを常に問いながら国造りに取り組むことで、その国の未来を担う子供たちに提供できる成果を高められているように感じます。

IDYFには、これまでも、これからも、様々な熱い思いを持った世界中の若者が集

まって、自分たちの国を、世界を良くするために何ができるか、喧々諤々の議論を繰り広げて思考を深め、少しでも答えに近づける場であって欲しいと思っています。

IDYF が、志が交わり、受け継がれ、“Design Our Future” の舞台となるプラットフォームにならんことを祈り、筆を置きます。



IDYF2013 共同代表・創設者 池上京

## 第4部 運営報告

---

### 事業スケジュール

IDYF2015の運営は以下のようなスケジュールで行われました。

2014年8月	運営組織発足 団体理念・目標の確定
9月	IDYF2015 テーマ決定、企画決定
11月	参加者募集開始
12月	参加者募集締め切り
2015年1月	参加者決定
3月1日-8日	IDYF2015 開催

### 後援・協賛

本年度も多くのお客様・団体様にご支援を頂いたおかげで、当フォーラムを無事開催することができました。IDYF スタッフ一同、改めて厚く御礼申し上げます。

#### 【後援】

外務省  
独立行政法人国際協力機構(JICA)

#### 【協賛】

オーストラリア留学センター  
パシフィックコンサルタンツ株式会社  
株式会社ビービット  
マルコメ株式会社  
ワタミ株式会社

#### 【助成】

公益財団法人国際平和機構  
一般社団法人東京倶楽部

#### 【個人寄付者】

小柴 巖和  
 佐藤 尚道  
 長谷川 将士  
 その他 14 名  
 (五十音順、敬称略。)

また、後援・協賛といった形以外でも数多くの方々にご協力いただきました。厚く御礼申し上げます。

## 会計報告

	項目	金額 (円)
<b>収入</b>		
	参加費	1,320,000
		154,000
	助成金	2,100,000
	協賛金	450,000
	クラウドファンディング	145,812
	前年度の繰越金	207,303
<b>合計</b>		<b>4,377,115</b>
<b>支出</b>		
	宿泊費・会場費	1,369,050
	食費	861,938
	参加者渡航費援助	655,000
	謝金	100,000
	交通費	301,112
	事務費	103,952
	印刷製本費	37,147
	その他	236,537
	*海外開催積立金	400,000
	次年度繰越金	312,379
	<b>合計</b>	
<b>収支</b>		<b>0</b>

\*海外開催積立金…将来的なフォーラム海外開催に当たる必要出費充当経費

運営メンバー
--------

運営メンバー構成（所属は 2015 年 3 月 1 日時点）

役職	氏名	所属
共同代表	渡邊紗世	東京大学教養学部総合社会科学分科国際関係論コース 4 年
共同代表	青柳拓真	東京大学教養学部総合社会科学分科国際関係論コース 4 年
研究	住吉彩乃	東京大学経済学部経営学科 4 年
研究	田中啓太郎	東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻 修士課程 2 年
渉外	斉藤諒	東京大学経済学部経営学科 4 年
渉外	重富由貴	創価大学経済学部経済学科 4 年
渉外	下村拓樹	東京大学経済学部経済学科 4 年
総務	井上裕紀	東京大学経済学部経済学科 4 年
総務	榊原杏菜	筑波大学人文・文化学群比較文化学類 4 年
広報	太田優人	慶應義塾大学法学部政治学科 1 年

その他多くの当日スタッフの方にもご協力いただきました。誠にありがとうございました。

## 第4部 終わりに

---

### IDYF2015 の成果と課題

ここまで報告書をお読みいただき、ありがとうございました。多くの方のご理解、ご協力のおかげでフォーラムを無事に開催できましたこと、心より感謝申し上げます。最後に IDYF の理念・目標から IDYF2015 の成果と今後の課題を総括し、本報告書の結びとしたいと思います。

#### 目標1 「国際開発に関心があるユースの継続的なネットワーク構築」

##### ○成果

国籍も背景も異なる多様な若者が一堂に会し、国際開発について議論する機会を創出したことは、それ自体が成果と呼べるものだと考えます。このように文字通り全世界から応募があり、多種多様な若者が集まる機会は世界的に見てもそう多くはなく、特に日本においては乏しいと言えます。過去の当フォーラムと比較してもその応募者、参加者は共に拡大しており、今回はより多くのユースに機会を提供できました。さらに今年度はクラウドファンディングの仕組みを活用し経済的困難を抱える参加者への渡航資金援助を行い、例年より多い2名への渡航費援助を行うことが出来ました。IDYF が開発を志すより多くの若者に開かれた機会となる一歩であったと思います。

国際開発の分野においては、先進国と途上国の垣根を越えて1つの課題に柔軟に取り組むことは、それに携わる人が有すべき態度であり、かつ実際の課題を解決するにあたって必要不可欠な関係性であると考えられますが、実際に課題解決に携わる際にはそれぞれの立場があり、虚心坦懐な関係を構築することは決して容易ではありません。その意味でこれからの国際開発を担うユースがその思いを共有し、発展させる場としてネットワークを構築する機会を提供出来たことは今後の国際開発の発展の基盤を作ることに大きく貢献するものであると考えます。

また、今年度から IDYF Alumni Network を立ち上げ、フォーラム OBOG がフォーラム後も関係を継続できる仕組みを立ち上げました。フォーラム後にもしっかりと実質的につながることが出来るネットワークを構築することが、フォーラム後も Design Our Future という理念を実現していくためには必要不可欠です。

##### ○課題

今年度当フォーラムは4500名を越える応募を受けましたが、実際に受け入れることが出来た参加者は44名に留まり、応募者に対する参加者の割合は大変小さいものとな



っています。国際開発に関心を有するより多くのユースがつながる機会を、フォーラムの質を向上させつつ拡充していくことが必要です。また、フォーラムに参加することは全ての参加者にとって経済的に容易なわけではありません。高い能力と志を有するユースのフォーラム参加を支援するための手段をより充実させていく必要があります。また今年度から開始した IDYF Alumni Network についても、より有意義かつ効果的に縦のつながりを作り、価値を創出できるプラットフォームとしていくために工夫をしていく必要があります。

## 目標 2 「自らの価値観、知識、考え方の幅を広げる機会の提供」

### ○成果

参加者 44 名 (34 カ国) のユース 1 人 1 人が、本事業から多くのことを学び、成長したと言えることが大きな成果です。具体的には次の 2 点における成長が大きいと言えます。第一にフォーラムのテーマである Hunger×Win-Win に関連して、多くの参加者から「飢餓問題についてよりよく理解できた」、「自分の国の課題解決に活かすことが出来る」という感想を得ました。ある参加者はフォーラム中に会った NGO の職員と「自分の国でどのように効果的な NGO を運営することが出来るだろうか」という話をしており、フォーラム後の具体的な活動に繋がるきっかけを提供することが出来ました。第二に、人種、背景、価値観等の多様性に富んだ環境での振る舞いについてです。多くの参加者が「このように多様性にあふれた空間は初めてである」という感想を漏らしており、自分と全く違う考え方をする人達と 1 つの目標を共有してチームとして活動することは、コミュニケーション等で困難も多くあったが非常に有意義な経験であったという風に述べていました。実際の国際社会の縮図である多様性に満ちた環境を多くの参加者が経験し、その困難さと魅力を感じる機会を提供することが出来たことは、多くの参加者にとって自らの世界が広がる経験であったと言えるでしょう。

### ○課題

どのように「自らの価値観、知識、考え方の幅を広げる」のか、その手段をより多様化し、それぞれの質を向上させていくことが今後の課題です。フォーラムに参加したからこそ得られた知識や考え方、価値観をより大きくしていく必要があります。そのためには様々な方法がありますが、外部の組織とのつながり等を更に構築し、フォーラム参加者に提供できることを増やしていくなどが考えられます。

## 目標 3 「社会に新たな変化をもたらす成果の創出」

### ○成果

フォーラムの成果を、単にフォーラム内で共有するに留まらず、社会的に発信するこ

とが出来ました。具体的には JICA 東京ホールを借り、参加者がフォーラムを通して考えた飢餓問題の Win-Win な解決策について報告会を行いました。また、その成果を、様々なメディアに取り上げていただくことが出来たことも成果です。具体的には東京大学新聞、国際開発ジャーナル ganas 等に当フォーラムについて取り上げてもらうことが出来ました。また SNS (Facebook 中心) による広報に大きく成功しました。当フォーラムは Facebook で 6000 名以上のファンを獲得しており、これは他のメディアと比較しても非常に大きい数です。IDYF に関心を有する人にリーチする強力な手段を構築できたことも今年度の成果といえます。

\*メディア実績

- ・東京大学新聞 Online (2015 年 2 月 20 日)  
『国際開発ユースフォーラム、3 月 7 日 (土) に開催』  
<http://www.utnp.org/news/idyf0220.html>
- ・国際開発メディア ganas (2015 年 3 月 19 日)  
『世界から飢餓をなくしたい！ 世界中の若者がアイデア披露』  
[http://dev-media.blogspot.jp/2015/03/blog-post\\_86.html](http://dev-media.blogspot.jp/2015/03/blog-post_86.html)
- ・国際開発ジャーナル (予定)
- ・One Young World (予定)

○課題

国際開発に関心を有するユースを世界中から集めたフォーラムとして、社会に具体的な新たな変化を起こすことが出来たかという観点からは、十分にその目標が達成できたということは出来ません。フォーラムの成果が、更に社会に対して価値を有するものにするべく、フォーラムの内容・形式あらゆる側面から改善を重ねていく必要があります。具体的にどのような手段でフォーラム及びその成果の社会的な価値を更に高めていくかを検討し実行していくこと自体が今後の大きな課題です。

IDYF2015 で達成した成果についてはそれを継続し、課題については改善を進めることで、IDYF は Design Our Future を実現するためのプラットフォームとして、今後も長期的に継続したフォーラムの開催を目指しています。フォーラムの開催自体を自己目的化することなく、更にフォーラムの価値を高めていくべく今後も努力をして参ります。どうぞ温かくお見守りいただければ幸いです。IDYF2015 に関わってくださいました皆様に深くお礼申し上げ、結びとさせていただきます。

IDYF2015 共同代表 青柳拓真 渡邊紗世

## IDYF2016 に向けて

皆さんご存知の通り今年 2015 年は、国際社会が先進国途上国の枠を越え、持続可能な将来に向けた普遍的目標「Sustainable Development Goals」を創りあげる年です。このグローバルアジェンダはこれからの世界を形作るものであり、特に将来世代を生きる私たち若者にとっては未来そのものであると言えます。それにもかかわらず、若者が政策の形成過程に参画したり、影響を与えたりする機会は限られているのが現状です。

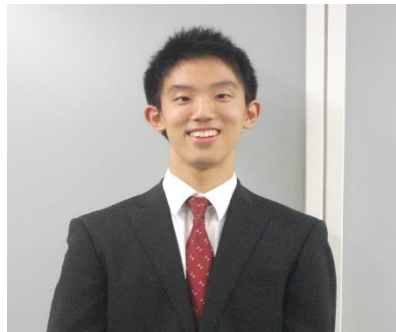
この状況を打開し私たちの声をこの世界の新たなゴールに含めるためには、世界中の若者が連帯し自らの声を集めてその発信力を高めていかなければなりません。私たち若者には、若者の、若者による、若者のためのプラットフォームが必要です。これこそ、2015 年以降の国際社会を見据えて IDYF が目指すべきものの一つであると考えます。

また国際社会に長期的インパクトを与えていくためには、IDYF は参加者が将来への志をつかめる場所である必要もあります。世界各地で活躍する若者同士の熟議、国際開発に特化した質の高いコンテンツ、経験豊富な専門家からの豊富なインプットなど、IDYF だからこそ提供できる学びの機会をさらに充実させることで、将来の国際開発分野の先導者となる人材を輩出するプラットフォームになることを目指します。

さらにこれからの IDYF は、「Youth」であるからこそ可能なことを積極的に実現していきます。確かにこれまでも、国際社会が抱える既存の利害対立やイデオロギー的対立を乗り越えた多様性を確保している点で「Youth」ならではのコンテンツを提供していました。しかし私たちだからこそできることはこれだけに限りません。貧困の現場で当事者に寄り添って本当のニーズを見つけること、そのニーズに対して既存のスキームに捉われない革新的なアプローチを生み出すこと、そしてそれらを自らの行動力をもって実現すること、どれも「Youth」であるからこそ達成可能なことだと考えます。

今後これらの大きな目標を達成するには、乗り越えなければならない様々な課題があるのは事実です。しかし私はそれらを乗り越えられると確信を持って述べる事が出来ます。なぜなら、4 年目を迎える IDYF には、皆様がいるからです。IDYF を様々な形でサポートして下さる方々や、世界各地から参加してくれる優秀な若者たち、そして OBOG の皆様。こうした方々がいることで IDYF は無限の可能性を持ち得るのであり、それによって国際社会に新たな価値を提供できるのだと考えています。この信念を胸に、国際社会が大きく動くこの 2015 年以降、皆様と共に IDYF を新たなステージへと引っ

張っていきたいと思います。そして来る 2016 年には、その第一歩となる成果を新たな仲間とともに世界へ発信していきます。



IDYF2016 共同代表 太田優人

【発行主体】

国際開発ユースフォーラム 2015 運営チーム

国際開発ユースフォーラム 2015 の開催を目的とした運営組織。10名の大学生・大学院生で構成される。2014年春から開催準備を行った。

ホームページ：<http://www.idyforum.org/idyfHTML.html>

Facebook Page：<https://www.facebook.com/idyforum>

---

国際開発ユースフォーラム 2015 報告書

2015年5月 発行

